

ブログ「野次馬雑記」2022年08月12日

## No599 あさま山荘から50年「多様な視点から考える連合赤軍」前編

今回のブログは、6月18日(土)に東京・目黒区で開催された、あさま山荘から50年 シンポジウム「多様な視点から考える連合赤軍」(主催:連合赤軍事件の全体像を残す会)の報告である。



当日のプログラムは以下のとおり。

14:00 開会挨拶

14:05 第1部 映像で見る連合赤軍事件

14:30 第2部 シンポジウム

パネラー: 森達也(映画監督・作家)

雨宮処凛(作家・活動家)

山本直樹(漫画家)

パトリシア・スタインホフ(ハワイ大学名誉教授) オンライン参加

ピオ・デミリア(ジャーナリスト) オンライン参加

当 事 者: 岩田平治(元革命左派)

雷野達作(元革命左派)

(15:45~ 休憩)

16:00 第3部 若い世代との対話

宮島ヨハナ(国際基督教大学1年)

中村真大(明治学院大学2年)

安達晴野(早稲田大学1年)

17:15 閉会挨拶

今回は、このうち前編として第1部と第2部の概要を掲載する。発言内容が不明な部分などは省略しているので、パネラーや当事者の発言を全て掲載している訳ではない。そのため「概要」とした。発言内容を全て読みたい方は、「連合赤軍事件の全体像を残す会」が今後発行する予定の冊子『証言』をご覧ください。

### <登壇者プロフィール>

#### ●パネラー

##### 森 達也(映画監督・作家)

最新書籍は、昭和の悪役プロレスラーであるグレート東郷の出生の謎に挑んだノンフィクション『悪役レスラーは笑う増補版』と、天皇と表現のタブーをテーマとしたファンタジー小説『千代田区一番一号のラビリンス』(現代書館)。現在は関東大震災後の朝鮮人虐殺事件を題材にした「福田村事件(仮)」を劇映画として製作中。公開予定は震災から100年を迎える2023年。クラウドファンディングをA-port 朝日新聞社(asahi.com)で募集中。

##### 雨宮処凛(作家・活動家)

1975年北海道生まれ。右翼団体、フリーターなどを経て2000年、デビュー。2006年より格差・貧困問題に取り組む。反貧困ネットワーク世話人。現在はコロナ禍での困窮者支援にも取り組む。◆著書『生きさせろ! 難民化する若者たち』(ちくま文庫)、『祝祭の陰で 2020-2021 コロナ禍と五輪の列島を歩く』(岩波書店)など多数。

##### 山本直樹(漫画家)

1984年、エロ漫画家としてデビュー。オウムなど社会問題の漫画化も多く、連合赤軍事件を忠実に追った長大作「レッド」「レッド最終章 あさま山荘の10日間」等のシリーズ(講談社)を10年以上、マンガ誌イブニングに連載した。森山塔名義でも執筆。◆著書多数

##### パトリシア・スタインホフ(ハワイ大学名誉教授)

ミシガン大で日本語・日本文学で学士号、ハーバード大で社会学博士、その後ハワイ大マノア校社会学部日本研究センターで教鞭をとる。戦前の日本の共産主義者の転向問題からはじまり、日本赤軍や連合赤

軍などについても研究し、著作を出版している。日本研究センターには「高沢文庫」があり、新左翼、赤軍派関係の膨大な文献が蒐集されている。◆著書『死へのイデオロギー 日本赤軍派』(岩波現代文庫)

### ピオ・デミリア(ジャーナリスト)

1954年、ローマ生まれ。ローマ大学法学部を卒業後、慶應大学に奨学生として留学する。弁護士。80年代より日本に在住し、日刊紙「イル・マニフェスト」・「SKY TG24」TVの極東特派員として活躍している。日本外国特派員協会では4年間第二副会長を務める。民主党政権で菅直人氏が首相時代には特別顧問を務めた。

東日本大震災の折には世界で唯一福島第一原発正門前に立ち、原発事故の実況報告。現在は日本外国特派員協会クラブで記者会見やイベントを開催するプロフェッショナル・アクティビティ (PAC) を務めている。◆著書『日本の問題～イタリア人記者・ピオが地震、津波、放射能汚染の「現場」で見たもの』(幻冬舎)

### ●当事者/岩田平治

1950年生まれ。“鯨でも取りたい”と入学した東京水産大学時代に革命左派に参加。山岳アジトで3カ月の活動の後、離脱。山から逃亡した最初の例となった。吉本隆明にインスパイアされて『「共同幻想論」による連合赤軍事件の考察』を著す。組木細工を作り地域の施設などに寄贈する。本日受付でお渡ししたキーホルダーがその作品。

(受付で配られていた岩田氏手作りのストラップ)



### 雷野建作

1947年生まれ。横浜国大時代に革命左派に加盟。71年2月、真岡市(栃木県)の銃砲店に押し入り猟銃10丁、装弾3000発などを奪った事件に関与、指名手配された。以後、武闘派のグループ等と交渉を任務とする「組織部」として主に都市で活動する。71年8月に逮捕・起訴されたため、山岳アジトでの“総括”には関わらなかった。逮捕後は指導者の川島豪との違いを自覚し、連合赤軍の破局後は総括論争を進め、72年秋に離党する。

### ●司会進行/金 廣志(塾講師)

1951年、大阪市生野区「猪飼野」の朝鮮人部落に生まれる。3歳のときに上京し、神奈川県座間、上野の「アメ横」で育つ。都立北園高校在学中に反戦運動に参加。高校を中退して1970年赤軍派に加盟。71年に全国指名手配されるも15年間の逃亡を続け、時効を迎えた。1986年より塾講師として再出発する。親の多くが、金廣志の経歴を知りながらも子どもの教育を託す中学受験のカリスマ講師として著名。父は韓国の済州島四・三蜂起事件のときのパルチザンであった。◆著書『自慢させてくれ!』(源草社)、『落ちたって、いいじゃん! 逆転発想にこそ難関中学合格のカギがある』(角川書店)、他。

### 椎野礼仁(編集者)

1949年生まれ。慶応大学時代に社学同(社会主義学生同盟)の活動家に。ブント分裂時には赤軍派には参加せず、戦旗派に所属。編集者として塩見孝也(元赤軍派議長)、鈴木邦男(元一水会代表)、柳家さん喬(落語家)などの書籍を出す。◆著書に『連合赤軍事件を読む年表』(ハモニカブックス)、『テレビに映る北朝鮮の98%は嘘である』(講談社+α 新書)、『パンタとレイニンの反戦放浪記』(彩流社)など。

### 【あさま山荘から50年 シンポジウム「多様な視点から考える連合赤軍」】

(主催: 連合赤軍事件の全体像を残す会)

### ●開会挨拶/椎野礼仁

本日は皆さんお集りいただきましてありがとうございます。

それでは「あさま山荘から50年 シンポジウム多様な視点から考える連合赤軍」を開始いたします。主催の「連合赤軍事件の全体像を残す会」は当事者が入っているんですが、何十年もやっております、名前が「全体像を残す会」と言うんですが、事件の後、いろんな評論が出たんですが、どれもちょとなあというものばかりで、どうもみんな部分像を語っているに過ぎないかと思ひまして、「全体像を残す会」というのを始めました。

今日は来られなかった植垣さんの名言がありまして、「みんな連合赤軍については、自分の分かる範囲で喋っているだけだよ、理解しているだけだよ」というのがありまして、それを少しでも広げていきたいと思って始めた会がこの会です。(中略)



第一部は「映像で見る連合赤軍事件」ということで、20分から30分にまとめたものを観ていただきます。

第二部はシンポジウムとして森達也、雨宮処凛、山本直樹さん、その辺の説明は第二部と第三部を仕切る金廣志さんの方から説明がありますが、パネラー、そして(ZOOMの)映像でパトリシア・スタインホフさんという、日本の新左翼とか戦前の共産党の転向問題に非常に詳しい研究者で、日本の新左翼のビラとか、そういう原資料は彼女のハワイ大学の研究室が一番揃っている、日本のどこよりもハワイ大学にそれが揃っているというパトリシアさんが参加されます。それからもう一人、ピオ・デミアというイタリア人ジャーナリストもイタリアから参加します。それでちょっと困った問題がありまして、お二人とも日本語には堪能なんです、ここ2、3年日本に来ていないので、ちょっと日本語が怪しいということなんです。会場に英語が堪能な方がいらっしゃれば、通訳をお願いしたいと思います。それでは第一部「映像で見る連合赤軍事件」に移ります。

●第1部 映像で見る連合赤軍事件



●第2部 シンポジウム



金廣志

第二部の司会をさせていただきます金廣志です。今映像がありました、改めてすごいことを体験したんだなと思いました。まるで外野みたいな言い方をしていますけれども、その中に居た人間として、こういう映像という形で観ると、少し不思議な感じもします。



映像にもありましたが、この一連の事件は合わせて「連合赤軍事件」と呼ばれているんですけども、連合というのは共産主義者同盟赤軍派と日本共産党革命左派という別々のグループが、1971年9月に連合して、12月に延べ29名のメンバーで新党を結成して一つの組織になったのが「連合赤軍」です。この「連合赤軍」が形成される過程で、「共産主義化」という言葉が持ち出されて、同志に対する総括、リンチ、殺害が起こるんですね。これは1971年の12月から翌年の2月にかけてのわずか1ヶ月半の間なんですけれども、その間に何と12名の同志を殺害するという事件が起こりました。先ほどの映像にもありましたが、追い詰められた5名のメンバーが「あさま山荘」に籠って10日間にわたって銃で抵抗して、2名の警察官と1名の民間人が射殺されるという衝撃的な結末を迎えたわけです。



そして私たち自身が当事者として考えるんですけども、ある意味社会の不正に声を上げて人類の理想社会を築くために立ち上がった、そのはずが何故このような事件に追い込まれていかなければならなかったのか。今日は当事者や様々なゲストの方を交えて、この50年を振り返って進行させていただきたいと思います。

まず当事者として岩田平治さんです。よろしくお願いします。岩田さんは、今日来ている連合赤軍のメンバーで総括リンチ事件をただ一人経験した方です。彼は指導者から命じられて山岳ベースを下山する機会があって、そのまま離脱して連合赤軍の許へは戻りませんでした。メンバーを離脱したということと、従属的だったという判断だと思えますけれども、5年という刑で収まったという、言い方はおかしいですけども、そういう経験をしました。隣は雪野建作さんです。雪野さんは1971年2月に栃木県真岡市の銃砲店を襲って、猟銃など11丁を取って、実弾2千発を奪って指名手配されて、その年の8月に逮捕されたものですから、連合赤軍メンバーに加わることはありませんでした。ただし、10年の獄中生活を送りました。

受付で配布した上毛新聞が「連赤に問う」という連載を行っています。上毛新聞は踏み込んだ記事を書いたなということで、今日は上毛新聞社にお礼を申し述べておきたいと思えます。

(受付で配布された「上毛新聞」)





第二部のパネリストを紹介いたします。映画監督であり作家としても多くの著作がある森達也さんです。アクティビストであり、作家としても旺盛な活動をしている雨宮処凛さんです。連合赤軍をテーマにした『レッド』を連載した漫画家の山本直樹さんです。



そして画面の方を見ていただきたいんですけども、ハワイ大学名誉教授のパトリシア・スタインホフさんです。もう一人が日本外国人特派員協会でジャーナリストをやっているピオ・デミアさんです。

このシンポジウムの進行ですが、最初に当事者の方に司会の方から大きなテーマで質問させていただきます。そして当事者の方にご意見をいただいた後に、オンラインで参加をいただいている

パトリシア・スタインホフさんとピオ・デミアさんに参加していただきます。その後はパネリストの方々には、様々な問題意識を含めたフリートークとさせていただきます。

まず岩田さんと雪野さんに第一の質問をさせていただきます。

私たちの父母は第二次世界大戦を体験しているんですね。戦争の犠牲者は世界で5千万人から8千万人とも言われていますけれども、日本だけでも3百万人余りの犠牲者を出しています。このような凄まじい経験をくり抜けてきた戦前、戦中世代の子がベビーブーマー世代だということを、一つまずご了解いただきました。すなわち、私たちの父母は戦争を体験し、身内や知り合いを失った世代なんです。これはある意味、未来を失った、死を知っている世代と言ってもいいのかもしれませんが。

それに対して、私たちは戦争を直接には経験しなかった世代です。戦後の平和と経済成長という時代に、ある意味では限りない未来を信じて、死を知らず生を知った世代と言っていってもいいかもしれません。

そのことを踏まえながら、お二方にお話を伺ってみたいと思います。

まずは、私たちはどのような理想を掲げて、またどのような未来社会を築こうとしてこのような新左翼運動に参加したのか、ということについて、当時の時代背景や日本や世界の社会状況を踏まえて語っていただきたいと思います。

また、そのような理想や未来社会を実現できなかった、そのことを踏まえての第2の質問です。

何故、理想者社会を求める運動というのは、歴史的に挫折、敗北しなければならないのか、そのことについても岩田さん雪野さんの経験、体験を踏まえてお考えをお聞かせいただければと思います。

なお、この質問については、ある女性からのメールが届いております。このことに触発されてお二方にお話を伺ってみたいと思いました。内容は

「かつての若者たちが、どんな夢を描き、どんな熱い思いを抱いていたのかをもっと知りたい。学び知ること、人間が持つ普遍的な課題と向き合っていきたい」

というものです。それでは岩田さんからお願いいたします。

#### 岩田平治

どうも大きな課題なものですから、そんなことに私がちゃんと答えられるか分からないんですけども、私自身もそういう運動に関わってきたというところと、こういう事件を起こして・・・というところを、前に少しお話ししたいと思います。

私ども、先ほど言ったように戦後のベビーブームの中で生まれた世代です。ですから戦争が終わって5年くらいですね。昭和20年に戦争が終わって25年に私が生まれたということですから、本当に戦争直後に生まれたということで、小学校から中学校に上がると、暗い戦争の時代は終わって民主主義の本当にいい時代になったんだよという中で、



明るい未来に向かって社会全体が行くんだという、小さいながらもそういう中で育ってきたんだと思います。ただ実際にある程度物心が付いて、高校生からだんだんと大人になっていく中で、やっぱりそういう今の状況、私たちが育っている社会状況というのは必ずしもそんなに素晴らしい状況ではない。やっぱり社会にはいろんな問題があるなと気が付き始めてきたんですけれども、ただ高校の時には、私は社会的問題に対して自分が関わっていくことなど毛頭思っていなくて、川端康成とかそういう文学の方が非常に興味があったとか面白かったし、そういう中で、こういう煩わしいことのたくさんある社会に関わっていくよりも、南氷洋でくじらでも捕った方がいいんじゃないかというような気持で水産大学を目指して受験して、こういう世の中から逃げてという言い方はおかしいかもしれませんが、そういうものじゃなくて生きて行こうかなと思ったんですけれども、実際やっぱり水産大学に入って全共闘運動の中でいろいろあった中で、そういう人たちの話や生き方を見聞する中で、やっぱりそういう風に世の中から逃げるんじゃないで、自分自身が積極的に参加して変えていくような方向で生きていかなきゃいけないなという風に思い直したとか考え直して、だんだんとそういう運動に参加するようになったわけです。

ただ、私も再三言っているんですけれども、すべての本や理論を読んで、これは正しいかなということやそういうものに入って行くわけではなくて、一緒にやっているそういう話を聴く人たちの人柄とか考え方とか、そういうものに惹かれて、そういう活動に入っていったと思いますし、私自身もそうでした。

大学で運動をしていく中で、私が入った時点では学生運動というのは圧倒的な機動隊の力でほぼ抑え込まれて、まだ水産大学の中はそれなりに全共闘も力を持っていましたけれども、そういう中で、やっぱり既存のセクトは訪米阻止とかいろんなことを言っても、街頭でデモをしているだけだったり、あるいは喫茶店の隅でタバコを吸いながら議論しているだけの中で、やはり革命左派というのは大学生でも労働者の中に入っていかなければいけないとか、あるいは実際に羽田空港の滑走路に火炎瓶を投げて、実際に阻止行動をするとか、そういう口先だけじゃなくて活動したというところに惹かれて、だんだんと活動するようになりました。やっぱり最終的には世の中を変えるには武力的な裏付けがなければ変えられないという考え方に共鳴して、今でもそうだと思いますけれども、正義が勝つのではなく、勝った者が正義みたいなどころがあるわけで、それは議論によって勝つということもあるんでしょうけど、最終的な対立軸になってくると、やっぱり武力というものが物を言うてくるという、今のウクライナとロシアの戦争を見てもそうなんでしょうけれども、ですからそういう考え方の中で革命左派の武力闘争にも、そういう形のものが必要だと思って賛同して活動を行ってきたということです。

それが、本来私どもが持っていた少しでもより良い社会、理想の社会を作る手段が何で変質していったのかと思うんですけれども、私どもが思い描いていた革命とか人民だとか、そういうものは私たちの頭の中にあるものでしかなくて、実際の人たちを見ていなかったし、そういう人たちのことを考えていなかったのかとは思っています。

**金廣志** ありがとうございます。

次に雪野さんからお話を伺いたと思います。

**雪野建作**

さきほどの映画で、当時を知る者にはよく知っていた風景だったんですけれども、若い人は恐らくあまり見ることのないものだと思います。当時と今との違いというのは、当時は一般的な知識人とか学生の中で、社会の発展というものは、資本主義から社会主義、それから共産主義というのは、前提なしに歴史の法則だと、そういう考え方が一般だったんです。その後、ソ連邦の崩壊などを経て、またいわゆる社会主義国が実際には自国の中でも抑圧をしているし、他民族も抑圧するということが白日の下にさらけ出して、今社会主義とか共産主義というものを当時と同じような意味で高く評価しているのは、まったく少数派になっていると私は思うんです。ただ、当時はそういう一般的な歴史観の下で、個々の学園ですとか、そういった闘争からしだいに運動に入って行くわけです。

私個人の事情を申しますと、両親は非常に左翼的な人でした。父は戦前、共産党員をかくまったということで、何日かブタ箱にブチ込まれたということがあって、それを自慢するように話していましたし、それから母方の親戚の中に、熊本から上京して幸徳秋水と付き合いがあって、大逆事件で逮捕されて死刑になってしまっている人がある。その人についても、私の父は非常に誇らしげに話をしていましたし、いろいろ資料を集めて子供たちに見せたりしていました。ですから幼少の頃から左翼思想は当たり前という関係の中で育ちました。

大学に入ったのが1967年で、羽田闘争があった年なんですけれども、入って自治会の会計の役員なんかやっていたんですが、当時は学生運動の諸党派はあまり魅力は感じなかったですね。所詮は学生運動だという形で、本当に世の中を変えるだけの思想もないと見ていて、その中で非常に小さなグループ、元ML派のグループだったんですけれども、彼らに惹かれました。

惹かれた理由は労働運動、農民運動というのが日本の革命の原動力であるということと言っていたことと、実際にそういう方面の運動をやっていました。それからこの人たちは、日本共産党から中国の文化大革命を基にして別れた人たちと共に、日本共産党左派神奈川県委員会を作るんですね。それで実際の闘争としては、新左翼の集会に参加はしていましたが、地元の基地撤去闘争などにも非常に積極的に関わっていました。

ただ、69年の4月にこの神奈川左派で分裂が起きまして、日本共産党の党員の人たちを排除する形で革命左派が出来ました。その革命左派が以降、羽田に突入して飛行機を止めて、実際に訪米を送らせてしまうといった闘争を始めました。この闘争は段々エスカレートしていきまして、69年から70年にかけて米軍基地にダイナマイトを仕掛ける。そうこうしている内に、基地でダイナマイトが爆発しても(新聞の)記事にも載らないという状況になって、非常に行き詰まりを感じていたんですね。他方、指導者の川島豪が逮捕されてしままして、彼は当初は偽装転向を装ったり、これは内部で批判もありましたけれども、それがダメだとすると獄外に身柄の奪還を指示したんですね。

それで、これをさして議論されなかったと聞いているんですが、聞いているというのは、その年は私は名古屋に行って活動していましたので、都内の状況をあまり知らない。指導部の論争もあまり知らないということで、その年の暮れに、柴野春彦と2人のメンバーが交番を襲撃して柴野さんが殺されてしまうという事件が起きました。ただその時は、単に指導者を奪還する時に使うピストルを入手するため、そういう目的だということで、警察官を殺害するとか、そういう目的ではなかったんですね。ところがこれは、赤軍派の人には非常に大きな衝撃を与えまして、両派の交渉と接近が始まっていくわけです。

その後、2月に真岡の銃砲店を襲うということで、私は本来メンバーではなかったんですが、「やれ」ということで、襲撃自体は首尾よく散弾銃を7丁、それから装弾もかなり多数を入手して、予想もしなかった弾圧がありまして、最終的に札幌まで逃げていくことになりました。その後、いろいろ動きがあったんですけれども、あの時のことを後から振り返って思いますのは、民間の銃砲店を襲ったということですね。これに関してもいろいろ議論があったらしんですけども、確かに銃砲店の人たちは民間人で権力のメンバーではない。しかし銃の管理を国から認められている点で全く民間人ということではない。本来は望ましくないんだけど、この際、しょうがないからそこから奪おう、こういう議論で押し込んで銃を奪うという行動をしているわけです。後から考えると、この論理が山での総括につながる根源になっていたと思います。

実際にその時に、店の子供たちも含めて縛り上げて、1年ほど後には自分の兄弟ですとか同志を同じように縛り上げて、それだけでなく暴行を加えて死に至らしめるというところまで行った。ですから、真岡の猟銃奪取事件の時に、すでに後の破局につながる芽が表れていたなと思います。

ただ、私自身は当時永田などの方針には反対でしたが、そのままで行ったらうまくいくはずがない、必ずいつか大きな壁にぶつかるはずだ、その時まで待とうという形で、心ならずもそれを貫くことが出来なくて従ってしまう。ただ、私自身は、当時は軍のメンバーではなくて、小さいセクトグループと交渉する役割をしていましたので、主に都会で活動していて、野営地にも1回か2回くらいしか行ってないという形で活動していました。その中で71年の8月に捕まって、すぐ起訴されてずっと獄中におりましたので、山の総括には関与しないで済んだんですけれども・・・。

実際にはその中で川島豪と意見の違いが出てきて、最終的に総括が公になった時点で、私としては川島豪は単なるテロリストだと見切りをつけて、内部で論争を始めました。ただ、その時に私の意見に賛同するメンバーはほとんどいなくて、その年の秋には離党しております。

当時の心境を振り返ると、非常に鋭い闘争、しかもそれによって犠牲を払うような闘争をやることに対して、非常に自負心というか、一種のエリート意識というか、そういう気持ちで闘争しております、そういったところに大きな落とし穴があったのではないかと思います。

**金廣志** ありがとうございます。

お二人の方に語っていただきましたが、私自身当事者ですので、私の方からも簡単にお話させていただきます。

最初にお話ししましたが、私たちは戦後世代で親は戦中派なんですね。そして戦後というのは、私たちが子供の頃は非常に貧富の差がありました。私なんか給食費が払えないでよくいじめられたりもしました。そして私たちの時代に、高校に上がる子は4分の3くらいでしたね。それで普通科の高校に行くのは60%もいませんでした。商業科や工業高校に進んで、皆さんご存じだと思いますけれども、重信房子さんは第一商業というところに行っています。商業高校で最も難しい学校で、私の中学校の同級生のSさんという一番の女性が商業高校に行きました。そういう時代でした。そして4年生の大学に行くのも15%前後くらいだったと思います。女性の大学進学率は5%前後しかない。そういう時代の中で高度経済成長を迎えて、その時に私たちはベトナム戦争を知ったんですね。ベトナム戦争、要するに北爆というのがあって、日本の基地あるいは沖縄からB52が飛んでいって、民衆を無差別に殺害する、殺戮する、その手伝いを日本はしているんだという、そういう怒りがあって反戦運動に入って行き、そのうち様々な社会問題に目覚めていったと思います。

そしてもう一つ、学校というのは学ぶ場ではないんだということを知りましたね。ある意味で資本主義の産業戦士を養成する場なんだ、ということに対する怒りもありました。そして私は在日なんですけれども、いわゆる外国人差別とか言いますが、私たちの時代は就職できませんでした。日本の企業に就職することが出来なくて、私と同じ歳の人間が日立に日本名で受験して合格したんですけれども、実は朝鮮籍だということが発覚した後に就職できなかった。そして長い裁判の末に勝つようになって、今はもう当たり前ですよ。外国人のいない企業なんて成長する産業ではないんですね。当然、弁護士にもなれませんでした。私の知り合いも司法試験に受かったんですけれども、採用されなくて、それも裁判になって最終的に弁護士になることになりました。そういう目に見えない様々な事があったんだということを皆さんが知っていただければと思います。

そして、理想社会を求める運動に対して挫折していったことに対して、私自身からすれば一言でいうと、理想より現実の方が重かったなというのが一つです。理想の中に民衆はいないんですね。理想の中には我々の観念だけが住んでいて、本当の手触りのある人間というものが見えなかったなと、そんな風を感じています。

パネリストの方にお話しをいただきたいと思います。

森さんにはこれまで何回もお話していただいていますし、ある意味でオウムのこととも関連するかもしれないけれども、自由にお話いただければと思います。

### 森達也（映画監督・作家）

よろしくお願いします。ここに座って目の前を見て、除菌アルコールタオルがあって、消毒薬があって、しかも一人ずつの前に置かれていて、何なんだろうと思ったけれど、まあこれだけしっかりとコロナ対策をやっているんですよとアピールでもあるんだろうなとは思いますが、何故ウオーターのラベルをはがすんだ。最近よくあるんですね、シンポジウムなんかで。今日はテレビが来ています。テレビの場合、もしかしたらニュースはまずやらないけれど、報道系の番組だったらもしかしたらラベルにモザイクかけるかもしれない。それをこっちで先にやっちゃってどうするんだろう。はがす必要ないんですよ。消毒液のラベルははがさないで、ペットボトルをはがす。つまり機械的にやっちゃっているわけですよ。

こういうことが若い世代はきっと気になるんです。たぶん大人になれば「いいじゃない、それくらい」と、「でもそうは言ってもだめですよ」

と若い人はきっと気になるし、口にすると、さらに年を取れば逆に目くら立てるのかもしれないけれど、でも基本的に若い人というのは、そうした原理、原則をどうしても見逃さないで、日本は戦争に負けて占領期があって、結果としてアメリカへの従属、ベトナム戦争があり、そのベトナム戦争に日本も後方支援として機能してベトナムの人たちが殺されている。それをどうしてもおかしい、我慢できないという声を上げる、しごく当然だと思うんですよ。ちょうどこの時期、アメリカの映画はアメリカン・ニューシネマです。正しく60年代後半から70年代前半ですから、ほとんど日本の全共闘後半から赤軍派の時代とかぶるんですけれども、アメリカン・ニューシネマと一口にすれば、皆さんどんな映画を思い出すかな？『明日に向かって撃て』とか『卒業』とか『タクシー・ドライバー』とかいくつかありますけれども、簡単に言ってしまうと、要するに反権力、反



権威そして正義と悪への揺らぎ。それまでのアメリカの映画というのは、ジョン・フォードが一番典型ですけど、正義の騎兵隊がいて、悪いインディアン、ネイティブ・アメリカンをやっつけるというのがパターンだったわけで、そうじゃないと、『ソルジャー・ブルー』という映画があります。アメリカン・ニューシネマの一番最初の頃の作品ですが、これはネイティブ・アメリカンの側から見た西部開拓史の映画です。そうすると全然逆なんです。いかに騎兵隊たちが侵略者で残虐かということが描かれている。視点が変われば変わってしまう。『卒業』にしても『真夜中のカーボーイ』にしても『タクシー・ドライバー』にしても、正義と悪なんていう概念は崩れています、もしくは違う所から見ている。だからそうした若い感性みたいなもの、これまで大人たちが当然のものとしてきたような社会秩序、その体制に対しての異議申し立て、それは当然と言えば当然ですよ。だからこの学生運動みたいなものは日本だけじゃないです。ドイツの赤軍派という存在があったり、ドイツだけじゃなくてヨーロッパ全体で学生運動が起こったり、世界的な現象だと思います。

やっぱり日本の場合は、あさま山荘と、その後の山岳ベースでの12人の殺害が明らかになった時に、急速にしぼみました。当時、僕は中学3年だったと思うんだけど、何となく覚えていますね。やっぱりあさま山荘



までは、学生だけではないんですが、学生頑張れという何かそういう雰囲気があったんですけど、でも山岳ベースが明らかになって、新聞に例の遺体があった場所の写真、警察が作っているんですけども、その写真が掲載されて、その日、もしくはその日以降、僕の知る世界というのは両親とかその周りだと思うんだけど、明らかに冷えしました。本当に熱が2~3度下がったという感じで、大きなきっかけになったことは確かです。

僕は20年前にオウム真理教の施設に初めて入って、サリン事件の2ヶ月後か3ヶ月後ですけど、入る前にちょっと身構えましたが、入ってびっくりしました。とても純朴で善良で純真な信者ばかりなんです。でも同時に純朴で善良で純真な信者がたくさんの人を殺そうとしたことも確かなんです。だから本当にオウムの事件について僕らやメディアが考えるべきは、狂暴、凶悪、冷酷な信者もしくは教団もしくは教祖が日本社会に牙をむいた、攻撃してきたではなくて、何故これほどに純朴で善良で純真な、彼らの入信動機は世界の人々を助けようですからね、そういった人たちがこれだけの人を殺そうとしたのかを考えるべきだったんだけど、結果的には社会はそれを拒絶しました。狂暴、凶悪、冷酷だからこういうことをやったんだというとても単純な図

式に押し込んでしまって、そのひな型は連合赤軍です。

解析しないまま、分析しないまま終わらせてしまうという、終わらせようとしている、ある意味で仕方ない。この数日、ウクライナ報道が報道の前線からどんどん後退している。コロナもすっかり遠景に行ってしまった。さらに言えば香港はどうなったのか、ミャンマーはどうなったのか。何も片付いていません。でも結局は皆どんどん忘れてしまう。今、ウクライナで市民が1万人死んだ、ロシア兵1万人、ウクライナ兵8千人という数字が毎日のように報道されていましたが、その間にイエメンでももう30万、40万人も死んでいます。でも、ほとんどの人はこれを知らない、報道されないから。だから報道されない可視化されない。

もう無かったことになってしまう。やっぱり無かったことにしてはいけないことはたくさんあります。でも特に連赤の事件というのは、その後の50年間の日本を考える上で、とても重要なエポックメイキングだと思うので、この取り組みには本当に敬意を表して、できる限りは支援したいと思っているので、今後も頑張ってください。

**金廣志** ありがとうございます。

次にオンライン参加のピオ・デミアさんと話したいと思います。

(注: オンライン参加のお二人は、日本語がよく聞き取れないので、正確でない部分もあると思います。それを前提にお読みください。)

## ピオ・デミリア

皆さんが仰ったことが(オンラインの不具合によって)ほとんど聞こえませんでした。皆さんよろしくお願ひします。



今、イタリアから参加していますが、まず改めて重信房子さんの満期出所のこと、大変嬉しく思っております。早いうちに彼女と再会を楽しみにしております。小菅の拘置所に面会に行きました時の深い感動は、今でも新鮮に蘇ってきます。彼女の眼差しの強さというか、彼女の信念の強さ。それでもう一つ、出所後の宣言に対しては、尊敬と称賛を述べさせていただきたい。本当に倫理的に人道的に政治的に、すべてにおいて非常に深い宣言であると思います。国民討論を引き起こすほど価値のある、非常に広く布教すべきだと確信しています。個人的な意見ですが、高校生にも読ませて議論させる

テキストだと思います。残念ながら今の日本はそれを実現できる国ではありません。

そして、イタリアのことを皆さんは聞きたいと思っているでしょう。イタリアでは、我々イタリア人が言う「鉛の時代」、鉛の弾丸の比喻でもあり、「重い」の意味もあります。その時は、イタリアではいろんな批判を浴びながら司法取引制度を開設しました。テロリストとマフィアを対象にして、簡単に言うと協力する受刑者は減刑あるいは場合によって不起訴まで保証されます。イタリア語でいろんな言葉を使っていたんですが、「政治の協力者」とか「悔い改めた裏切り者」。そのおかげで、いろんな不公平が起きました。例えば殺人で自首した人は、国のお金をもらって長く外国で年金をもらって普通に生活できた。今は新聞社や大きな会社で広報の仕事も持っている。その人は1980年に2人で、実際は7人でしたが、イタリアの有名な記者を殺した人たちです。彼らは協力して判決は懲役8年でしたが、その8年間を無視して、そのまま外国に行かせた。一緒に行った残りのコマンドの5人は、協力しなかったので22年です。それで非常に不安な実情になったんですね。

この点において、日本とイタリアは一致点があります。例えば、さっきの重信さんの話がありました。イタリアではちょっと違いますが、「赤い旅団」の幹部のクルチョさんですね、彼も人を直接殺したことはありません。彼は「赤い旅団」の創設者であるだけです。

彼は1998年に4年早く刑務所から釈放され、重信さんと同じように、だいたい21年間刑務所に居て、12年間は厳しい刑務所体制にあったんです。それで人を殺していないということは犯罪を犯していない、思想的な犯罪だけ。それは私が何回も書きましたけれど、それはイタリアと日本の違いは、イタリアでは何となく政治的な解決を目指している。しかし日本では、私はこういう言葉を使いますが、「国家仇討ち」の概念です。ということは、国家はこの人たちからすごくやられたから、「仇討ち」として絶対許さない、絶対解放しない。刑務所から出てからも村八分にされているんです。

イタリアでは、例えばクルチョさんですね、彼は21年間で刑務所出てから、今は大学やNGOやNPOの先生とか活動をいろいろやっています。それでテレビの特集でよく出てきます。

逆にトリアッチは、テロリストの関係ではなくて、ただの哲学者ですが、彼は村八分されています。イタリアでは彼はテレビ、マスコミに絶対に出ないことになっている。アメリカでよく出ています。

だいたいそういうことを言いたかったんですが、是非、この50周年の機会に、もう1回日本でもアクティブ政治への関心をまたやってみましょう。私が見ると、日本は今寝ています。

日本は寝ることを止めて起きてください。

**金廣志** ありがとうございます。

少しだけ付け加えますと、今のピオの話は、イタリアだと「赤い旅団」、西ドイツだとバーダー・マイン・ホフグループ(赤軍派)というのがありました。そして、そのメンバーで刑務所に入っている、あるいは収容されているのは日本赤軍だけなんですね。バーダー・マイン・ホフグループは全員釈放されました。「赤い旅団」の思想家アントニオ・ネグリはフランスに亡命してイタリアでは評判が悪いんですけども、帰れないわけではない。イタリアは和解をしたんですね、戦後の和解。日本では和解ではなくて「国家のリンチ」を与え続けているということを行っているのではないかと思います。日本も和解をして、新しい道に進むべきではないかと言っていたと思います。

それでは、次にパトリシアさん、お願いします。

パトリシアさんは日本赤軍に対して本を書いています。その中で日本の社会の構造ということを非常に分析されているんですけども、連合赤軍の総括事件、仲間を次々とリンチで殺害する、こういう行動様式というのは特別な行動なんでしょうか？それとも日本人に特有な形なんでしょうか？これは日本の軍隊の経験も含めてなんですけど、日本人的特徴なのか、あるいは世界のどこでも起こるような事件であったのか、その辺について伺いたい。

もう一つは、連合赤軍は集団的暴力を外に使う前に内部に向かいました。自分たちに向かって暴力を使いました。それについて、暴力というものを止めることはできるのでしょうか。もしそれが出来ないとすれば、その暴走を止めるためには私たちはどのようにすればいいのか、パトリシアさんのお考えをお聞かせいただきたいと思います。

### パトリシア・スタインホフ



最初の質問は、実は両方ともそうです。ある意味では、世界中には集団暴力の似ているような事件があります。けども、日本の場合はもちろん特徴もあります。私が日本の例を勉強して、日本の特徴としては、日本ではアメリカよりも上下関係が強くて、指導者が何を言ったら、直接に反対できない、特に連合赤軍の事件はそうでした。最近はやっと違っていると思いますけれども、その時代はそれが集団暴力の一つの原因だったと思います。

けども、集団暴力があっても、それを止めることができます。連合赤軍の場合も、過程を詳しく見たら、止められる時もありました。最初の頃はあったんですけども、みんなもうできないという気

持ちで、何もできないで止まったわけです。そして別々の事をしてから、また暴力が出てきました。そして最後には、周りの状態が違いましたから、もう続くことができませんでした。だからそういう意味では、暴力があっても、あとは協力しないようにすることもできます。そして、別の日本の場合と違って、アメリカとの比較では、皆さん知っているかもしれませんが2021年の1月6日、アメリカでは大騒ぎになりました(議事堂占拠事件)。千人以上の証言者もいるし、いろんな資料も集まっています、発表して、テレビで部分的にその結果を見せています。

そして特に昨日は、トランプ前大統領が中心的な活動になっていたんです。本当に彼が周りの人たちが反対して直接に言ったんですけども、彼が無視して、彼がしようとしたことだけを考えて、それをやろうとしたんです。そして、これは日本では信じられないことですが、ある意味では彼が森さん(森恒夫)に似ている立場です。自分の指導が強かったので、他の人たちも彼が言っているのを、公に何も言わなかったんです。今までは公に言わない人たちは、本当に何を言ったのかということ今、公にしている。アメリカの会議で出ている資料では、トランプが副大統領を殺そうとしたんですよ。一緒にやったわけですが、最後に彼が意味がないから捨ててもいいと。トランプ大統領の考え方は集団暴力に近いのではないかと思います。だから、アメリカでもそのような事が起こる。

この会議では、今までは野党の人たちが反対しているけれども、この資料からは、トランプ大統領の真ん中の人たちの本当の言葉が出ているから意味があると思います。

金さんの質問について、この事件はどこにでも似ているものがあると思います。けれども日本の場合は特徴があります。そして、もう一つの質問については、もちろんできます。それを超えるためには何が必要ですか？実は、「残す会」が前からやっている、資料を集めて対談を記録している言葉、それがその方向なんです。だから「残す会」そのものが、そういう問題の答えなんです。

**金廣志** ありがとうございます。

私たちが連合赤軍のリンチ殺害事件というのを止めることができなかった。しかし、今、パトリシアさんは「止めることができるんだ」というお話がありました。これは後で岩田さんに聞いてみたいと思います。アメリカ、ヨーロッパというのは非常にラディカルな左翼が強くなっているんですね。日本に居ると気付かないんですけど、アメリカではサンダースに象徴されるような社会主義者たちが現れたりして、しかもその社会主義者の中でもラディカルな若い人たちがいる。ヨーロッパでは「緑の党」とかいろんな要素があるんです

けれども、左翼が非常に活躍している状況にある。それに対する応援のメッセージもあるんだと思います。パトリシアさんもピオさんも日本で講演していただきたいと強く思いました。

次にパネリストからの発言として、日本では珍しく右翼と左翼と、しかも鈴木邦男と塩見孝也を手玉に取ってきた雨宮処凜さんに、少し楽しく語っていただければと思います。

### 雨宮処凜

私は1975年生まれでベトナム戦争が終わった年の生まれです。自分自身が10代の時とか、本当に生き



づらくて、リストカットして、半径5メートルの事しか考えていないとか考えていけないとか、禁止されているように思っていたんですね。そんな時にテレビで学生運動の映像が流れると、ものすごくたぎるものがあるって、何でもこういう事があるって、自分自身が半径5メートル、1メートルくらいで恋愛とカラオケと買い物と、それ以外禁止されているみたいなそういう状態で、何で生きているんだろうと思っていた時に、鈴木邦男とかそういう右翼、左翼の人たちを知って、まず鈴木邦男さんと出会ったら、右翼の人っていい人だと勘違いしてしまって、いろんな人と知り合って、芋づる式に塩見さんとも出会い、塩見さんが初対面の私にいきなり「北朝鮮に行こう」と言って、1999年に初めての海外旅行で北朝鮮に行き、2回目の海外旅行は一水会の木村さんに誘われてイラクに行ったんですけれども、そんな感じでやっているところな感じに仕上がったんですけれども、まあ結局いろいろそういういろんな人との付き合いの中で、自分が何であんなに生きづらかったかという10代の頃に、半径5メートルって、社会と政治から完全に断絶されて、そこと回

路が途切れて、何か社会に関心を持ち、何かを言おうものなら、「社会のせいなんかにするのはお前のせいだ、自己責任だ」と口を封じられるような事の原因はどこにあるんだとずっと考えて、連合赤軍という一つの事件もきっかけなんじゃないかと辿り着いたときはすごく衝撃というか、皆さんが連赤で山に行ったのと同じ世代の20代の時に、私自身の周りにあったのは右翼左翼の愉快なおじさんたちとの繋がりが一方で、自分のリアルな生活の場ではリストカットをしている人たちであったり、20代で自殺する人、あるいは2003年頃からネット心中が流行って、インターネットで自殺を一緒にする人を募集して待ち合わせて、レンタカーを借りて山奥に行って練炭を焚いて死ぬというのが同世代の若者の間で流行っていたわけです。たぶん彼女たちは自助グループをやっていて、自助グループというのはいいものだと思いますが、ネットで始まった自助グループというのは危ないですよ。プロがないから、死にたい若者だけが集まって、ある意味総括していくとか、連赤の総括シーンとそっくりなんです。皆が話すのは革命とかでは全くなくて、何故自分は生きていちゃいけないのかということ、散々話すわけです。遺書でも謝りながら死んでいく。自分は役に立たなくて何もできなくて本当に申し訳ないという形で、心を病んで死んでいく若者たちの背景には、やっぱり予め政治や社会から断絶されたとか、私自身右翼に入ったりする中で、本当に若者が政治に関心を持つと録なことにならない、その時に出てくるのが連合赤軍の事件で、そういうので詳しく知っていたんですけれども、今に至る生きづらさですよ。連赤のトラウマから解放されたと思ったのは、この前の全共闘の人たちの本(『全共闘未完の総括』)の出版記念の集まりに行って、みんな60年安保とか70年安保の人の中で、一人2015年安保の人がいて、中学生で2015年の安保法制反対のデモに参加している人がいて、2015年安保の時にシールズとか出てきた時に、初めてそういうトラウマから全く知らない世代が来たんだなと思いました。私自身は、自分は生まれていない年の話だし、関係ないのに、連赤は何故か言い訳をしなくてはいけないと言うか、「そういうんじゃない」と言わなきゃいけないという感じで居た。あともう一つ、良かったのは、結構ゴスロリとかで運動していたんです。「チャラチャラするな」と言われたら、連合赤軍の事を言ったら黙ると言うのは、私にとっては良かったです。

まあそんな形で連合赤軍事件は関心が尽きません。なので、必ず参加させていただいて、10年前に参加した時に、「そのような事件が今も社会と世界と断絶する形で影を落としていて、選挙が始まっても若者は政治に関心ないみたいなことも関係あるんじゃないですか？」と連合赤軍の人に聞いたら、「いや、そんな事言われても」と言われたことがあります。

以上です。

**金廣志** ありがとうございます。

2015年安保の時に、私も国会前にいましたら、突然雨宮処凛さんの演説が聞こえてきて、我々の時代の演説とは全く違うんですね。我々は政治的な演説しかできないんですけども、もっと地べたを這うような演説に、非常に関心したことがあります。新しい時代が生まれたんだなとその時思いました。シールズより処凛さんの方が恰好良かったですね。

今日はありがとうございます。

それでは漫画『レッド』を連載された山本直樹さんにお話を伺います。山本さんは大変エロチックな漫画を描く方で、何故『レッド』を描いたのか？もう一つ、『レッド』を描く過程で「連合赤軍には謎は一つもない」という話をされていました。そういうことも含めてお話いただければと思います。

### 山本直樹



山本です。ディスカッション的なものかと思って、自分で喋ることをちゃんと決めてきていなかったんですけど、『レッド』という漫画を描きながらぼんやり思っていたことがいくつかありました。

最初にあさま山荘事件、連合赤軍事件のことを漫画にしようかなと思ったのは、元々オウム(真理教)の事件が95年にあって、この人たちって何なんだろうと思って、オウムの当事者は自分の考えを本にしていなかったの、一緒ではないけれど、僕が子供のころの学生運動に近いとことがあるのかなと思って、その人たちの書いた本をいっぱい読んだら、書物として面白くて、坂口さんとか永田洋子さんとか植垣さんの書いた本を読むと、これを漫画にしたら絶対面白いだろうな、でも僕は面倒くさいから絶対やりたくないと思っていたんですけども、編集者にそそのかされて始めてみたという感じです。

何でこんな事が起こったのかというのは、世界中あちこちで起きている。絵を描いている時、理屈を考えている部分が空くので、そこでいろ

いろ考えていたのは、人は必ず死ぬ、死んだらもう再現不可能である。現実というのは、生きて暮らして死んでそれで終わることだと昔から考えていたんですけども、それ以外は全部フィクションであり、言葉だなと思うんです。現実生きて暮らして死ぬ以外は全部言葉である。言葉は生きるための、言葉もそうだしお金も宗教もすべてフィクションなんですけれども、それは生きるための大事な道具である。だけれども、フィクションの方が言葉の方が、生きて暮らして死ぬということよりも上位に来てしまうと、命が軽くなって自分が死んだり、他人を殺したりするんだろうなと思っていました。だから反対の現実とフィクションの混同は戦争なんでしょうけれども、生きて暮らして死ぬだけでいいのに、それ以外の何かを上位に持ってくることで全部悲劇が起きるんだなあ、という風に僕は一般化して考えて漫画を描いていました。だから言葉がどんどん回転して、生きて暮らして死ぬということよりも大事な事のように思えてきちゃうんじゃないか。それは世界中に起こることだし、あらゆる原理主義、イスラム原理主義も新自由主義も原理主義じゃないですか。フィクションの方が大事だよと言ってしまふのは、僕は全部原理主義だと思っているけれども、学校の教室のイジメから会社の中のハラスメントまで、共通して捉えることが出来るんじゃないかなと漫画を描いていました。

**金廣志** ありがとうございます。

山本さんのフィクションと現実感の話がありましたけれど、山本さんの漫画の中にもあるんです。一つのフィクションの中から実際のリアルが浮かび上がってくるようなことがあるのかなと思います。

もっとディスカッションする予定でしたけれど、時間がなくなってしまったので、森さん、最後に言葉が複数になると暴走するという話をさせていただいて、それで納めていただきたいと思います。

## 森達也

今、金さんが言っちゃったよ。(笑)同じ事言いますが、「主語が複数になると述語が暴走する」と何かに書いたら、鈴木邦男さんはすっかり喜んじゃって、彼がいろんなところで勝手に使ったりしていて、でも自分のフレーズだから確かにその後取材しても常に思うのは、一人称単数の主語を忘れて、つまり組織に埋没すると、人は時としてありえないことをしてしまう。後になってから、何であんな事ができたんだろうと。これはそんなに遠い話ではなくて、軍隊でもそうだし会社でもそうだし、僕たちは組織に生きる生き物なんですよ。人は単独では生きられないから。だから常にこれがあるんだけど、その自分たちの負の特性を知る上でも、歴史に何があったのか、朝鮮人虐殺があったり、南京虐殺があったり、あるいは今でもそうですよね、いろんな事が日々起きているし、正しくオウムも連合赤軍もその典型なので、しっかりとこれを分析し解析し、何のために分析するのかという、同じ間違いを犯さないためですよ。ところが日本はそれをしない。負の歴史だと言って目を背ける。バカじゃないかと思えますよ。だから結局また同じ事が繰り返されてしまう。だから本当に一人ひとりがもっと、そんなに難しくないんですよ、常に主語を我々でなくて私、俺にしてあげばずいぶん世の中変わって見えますよということを言いたいです。(拍手)



**金廣志** ありがとうございます。



どうしてもそれを最後に言って欲しかったんです。それは、我々のかつての左翼運動あるいは連合赤軍の運動、これは複数だったんです。「我々は」って必ず語ったんです。「私は」と語らなかったんですね。要するに一人ひとりが自立して生きて行く、自立して物を考えるということができなかったことが、ある意味で悲劇につながっていったように思います。

それは決して知識でもない、何かたくさん知っているからとかそういうことでもないです。人間の生きて行く知恵、そして要するに本人の言葉を語るという、そういう風に、やっとな長い月日でなれるようになった

のかなと思っています。

第二部はこれで終わらせていただきます。

## 椎野礼仁

主語が複数になると暴走するという事なんですけれども、我々が「我々」と語っていたことの一つの価値観の中に僕らが置いていたのは「連帯」という言葉があるんですね。東大闘争で(占拠した)安田講堂(の中)に「連帯を求めて孤立を恐れず 力及ばずして倒れることは辞さないが 力を尽くさずして挫けることを拒否する」という言葉があったんですけれども、大江健三郎の何かの小説にも最後に出てきますが、「連帯」という言葉があって、その「連帯」という価値観が「我々」と語らせたんじゃないかと、今思いました。

(第3部に続く)

ブログ「野次馬雑記」2022年09月02日

## No 600 あさま山荘から50年「多様な視点から考える連合赤軍」後編

今回のブログは、6月18日(土)に東京・目黒区で開催された、あさま山荘から50年 シンポジウム「多様な視点から考える連合赤軍」(主催:連合赤軍事件の全体像を残す会)の報告である。



2022年6月18日(土) 14:00~ 17:30(開場 13:30) 目黒区中小企業センターホール  
東京都目黒区目黒2-4-30 (目黒駅南口徒歩10分)  
パネリスト 森達也、森達也、山本直樹、パトリシア・スタインホフ(オンライン)、  
ピオ・デミア  
司会者 岩田平治、金保志、釘原信高、雷野建作  
会費 500円(送料別)

当日のプログラムは以下のとおり。

14:00 開会挨拶

14:05 第1部 映像で見る連合赤軍事件 (前回のブログに掲載)

14:30 第2部 シンポジウム (前回のブログに掲載)

パネラー: 森達也(映画監督・作家)

両宮処凛(作家・活動家)

山本直樹(漫画家)

パトリシア・スタインホフ(ハワイ大学名誉教授) オンライン参加

ピオ・デミア(ジャーナリスト) オンライン参加

当 事 者: 岩田平治(元革命左派)

雷野建作(元革命左派)

(15:45~ 休憩)

16:00 第3部 若い世代との対話

宮島ヨハナ(国際基督教大学1年)

中村真大(明治学院大学2年)

安達晴野(早稲田大学1年)

17:15 閉会挨拶

今回は、このうち後編として第3部の概要を掲載する。発言内容が不明な部分などは省略しているため、若い世代や当事者の発言を全て掲載している訳ではない。そのため「概要」とした。発言内容を全て読みたい方は、「連合赤軍事件の全体像を残す会」が今後発行する予定の冊子『証言』をご覧ください。

<登壇者プロフィール>●若い世代

宮島ヨハナ(国際基督教大学1年)

インターナショナルスクール在学中、卒業研究のテーマに「入管問題」を選ぶが、入管収容者に対する人権侵害を知り大きなショックを受ける。2021年4月、高等部3年在学中の時に、出入国管理及び難民認定法(入管法)改正案に反対する集会を自ら呼びかけ、事実上の廃案につながる働きをした。当事者意識を大事にし、社会の変革に必要なことは「愛」だと語る。黒人差別への反対運動に取り組んだ、公民権運動活動家ローザ・パークスさんの“You must never be fearful about what you are doing when it is right.”(正し

いことをしているのなら、決して恐れてはいけない」という言葉に、勇気をもらっている。

### 中村真大（明治学院大学 2 年）

東京都立北園高校在学中に、北園高校の頭髪指導をめぐる校則・自由の問題をテーマにした、ドキュメンタリー映画『北園現代史 ～自由の裏に隠された衝撃の実態～』を製作・公開。YouTube に「限定公開」された 2 日後には再生回数 1 万回を超え、社会に大きなインパクトを与えた。評判を呼んだ映画はその後東京ドキュメンタリー映画祭にても特別上映される。

全国の高校生や卒業生たちに呼び掛け、学校の自由や理不尽な校則について問題を討論・告発する「全国校則座談会」等を企画し、YouTube などでも発信している。

### 安達晴野（早稲田大学 1 年）

東京都立北園高校元生徒会長。歴史的に自由な校風が伝統である北園高校で、校則に定めのない頭髪指導が行われたことをきっかけに、校則問題は人権問題であると声をあげる。映画『北園現代史 ～自由の裏に隠された衝撃の実態～』では教員の理不尽で半強制的な指導に粘り強く抵抗する姿が多くの人々に共感を与えた。様々な意見や価値観を前提にして、お互いを尊重し理解しようとする「対話」を大切にしている。

「社会変革は実現しうるし、自分たちの手で実現できる」と語る。将来は「弱い立場の人の拡声器」になることを目指している。

### ●当事者/岩田平治

1950 年生まれ。“鯨でも取りたい”と入学した東京水産大学時代に革命左派に参加。山岳アジトで3カ月の活動の後、離脱。山から逃亡した最初の例となった。吉本隆明にインスパイアされて『「共同幻想論」による連合赤軍事件の考察』を著す。組木細工を作り地域の施設などに寄贈する。本日受付でお渡ししたキーホルダーがその作品。



（岩田さん手作りのストラップ）

### 雷野建作

1947 年生まれ。横浜国大時代に革命左派に加盟。71 年 2 月、真岡市（栃木県）の銃砲店に押し入り猟銃 10 丁、装弾 3000 発などを奪った事件に関与、指名手配された。以後、武闘派のグループ等と交渉を任務とする「組織部」として主に都市で活動する。71 年 8 月に逮捕・起訴されたため、山岳アジトでの“総括”には関わらなかった。逮捕後は指導者の川島豪との違いを自覚し、連合赤軍の破局後は総括論争を進め、72 年秋に離党する。

### ●司会進行/金 廣志(塾講師)

1951 年、大阪市生野区「猪飼野」の朝鮮人部落に生まれる。3 歳のときに上京し、神奈川県座間、上野の「アメ横」で育つ。都立北園高校在学中に反戦運動に参加。高校を中退して 1970 年赤軍派に加盟。71 年に全国指名手配されるも 15 年間の逃亡を続け、時効を迎えた。1986 年より塾講師として再出発する。親の多くが、金廣志の経歴を知りながらも子どもの教育を託す中学受験のカリスマ講師として著名。父は韓国の済州島四・三蜂起事件のときのパルチザンであった。◆著書『自慢させてくれ！』（源草社）、『落ちたって、

いいじゃん! 逆転発想にこそ難関中学合格のカギがある』(角川書店)、他。

【あさま山荘から50年 シンポジウム「多様な視点から考える連合赤軍」】

(主催：連合赤軍事件の全体像を残す会)

### ●第3部 若い世代との対話

#### <若い世代の自己紹介>

**金廣志** それでは第3部を始めたいと思います。

今壇上に、左から中村眞大君、宮島ヨハナさん、安達晴野君が座っています。明治学院大学2年生、国際基督教大学1年生、早稲田大学1年生で非常に若いです。若いですが、高校時代に、我々から見ると、こんなに素晴らしい活動をしたのかと感心させられる活動をして、現在もアクティブに様々なことに挑戦していると思います。

(5分ほど3人の紹介ビデオが流れる)



#### 宮島ヨハナ

簡単に自己紹介をお願いします。

宮島ヨハナと申します。9月から国際基督教大学に入学しました。高校がインターナショナルスクールで、高校の卒業論文がきっかけで、入管問題に関わっています。今日はよろしくお願ひします。入管自体はあまり知られていないと思うんですけど、入管というのは在留資格がない外国人又は在留資格が切れてオーバーステイになってしまった外国人が、帰国するために收容される施設なんですけれども、そこで問題がたくさんあって、強制收容の問題を説明したいと思っていて、強制收容で年間に收容される人は、他の国だったら收容期間が決められていて、日本は收容期間が定められていないので、半分以上が6ヶ月以上收容されていて、長い人だと1年、最悪のケースだと7年とか收容されていて、すごく問題になっているのは、いつ入管から出られるのか分からない状況なので、精神的に参ってしまって、うつ病を発症する人も多いです、自殺するケースもあるので…



#### 中村眞大



#### 安達晴野



安達晴野と申します。私は、「校則のない自由な北園」と言われている高校で3年間生徒会長として、校則にはない頭髪指導の問題に取り組んできました。今、私が金髪にしているんですけども、これは高校を卒業したから金髪にしたのではなくて、昨年の9月に金髪にしました。なぜ金髪にしたかという、元々僕は入学してから3年生の9月まで、ずっと黒髪で過ごしてきた、自分自身黒髪が好きだったんですけども、学校が昨年9月に頭

髪検査をやると言い出しまして、僕としてはずっと頭髪指導について異議を唱えてきた時に、学校側と話し合うことが出来ずに、生徒のいろんな声を無視する形で頭髪検査を行うことに非常に疑問を感じまして、頭髪検査に引っかかれば、嫌でも頭髪検査について先生方と話し合う機会が得られるので、じゃあ金髪にしちゃおうと思って、頭髪検査の日に合わせて金髪にしてみました。

(ビデオ上映終了)

### 金廣志

若者が前に3人いるけど、どんな奴なんだろうというのもあるかもしれませんが、彼等がどのような活動をしてきたのかをイメージビデオで作っていただきました。

改めて、もう1回紹介いたします。

国際基督教大学1年生の宮島ヨハナさんです。(拍手)明治学院大学2年生の中村眞大君です。(拍手)早稲田大学1年生の安達晴野君です。(拍手)



### <若い世代が向き合っている社会問題とその活動>

3人のパネリストは非常に様々なところで活躍していて、我々の頃に比べて、非常によく考えて、よく成熟しているなと思うことがあります。

まず、3人の皆さんには、今現在の様々な社会問題と向き合っていて活動されていると思いますが、どのような社会問題と向き合っていて、そしてどのような矛盾を抱えたりしながら活動しているのかということをお話していただきたいと思っています。そしてその問題は、日本社会がどのような方向に向かえば解決していくのか、今の考えでいいですから、お話していただければと思います。

宮島ヨハナさんからお願いします。



### 宮島ヨハナ

宮島ヨハナと申します。本日はよろしくお願ひします。

私はさきほどの動画でもあったとおり、入管問題について卒業論文で調べたことをきっかけに、この問題に関わってきました。この問題は最近報道されることが増えたんですが、なかなか市民の方に知られていないと思うので、手短かに説明したいと思います。

そもそも入管とはどういう場所かというと、入国管理局というのは、日本人外国人の出入国審査、外国人の在留管理、難民認定などを行う法務省の外局です(現在、出入国在留管理庁)。私が調べたのは、その収容所で起こっている人権侵害について調べていて、本当に調べれば調べるほど、本当にひどいことだなと思って、私たちは戦争を経験していない世代でもあるので、



日本は平和なイメージがあって、人権侵害という言葉と結びついていなかったんですが、本当に調べていくと、こんなことが日本でも起こっているんだということにすごく衝撃を受けて、自分でも何かこの問題に対して行動を起こしたいと思いました。

その一つのきっかけとして、私の父が、入管の仮放免の保証人をしていまして、幼い頃から仮放免の方と関わりを持っていたので、その中で一人私にとって印象に残っている方がいて、カメルーン人の女性の方なんですけれども、その方は私がインターナショナルスクールを受験する時に英語を教えてくれていまして、その方も難民申請者で、カメルーンから母国の紛争などから逃れて来日したんですけれども、難民認定されなくて、日本も0.4%という極端に低い難民認定率なので、それが原因で認定されなくて仮放免の生活を続けていました。すごく穏やかな方で、彼女は乳ガンを発症して、胸が痛いと言っても適切な治療を受けられず、最終的には仮放免されている時に、支援者のおかげで医療を受けられたんですけれども、手遅れになってしまって、去年の1月に亡くなりました。私はこのニュースを新聞記事で読んで、本当に衝撃を受けて、もっと衝撃的だったのは、彼女の在留資格が取れたのは亡くなった3時間後だったんですね。もっと早く在留資格が取れていれば、もっと早く入管内で適切な医療を受けていれば彼女は生きられたかもしれないと思って、本当に私は衝撃を受けました。

卒業論文で調べている中で、去年の3月に政府が国会に提出した「入管法改正(案)」がありました。括弧付きの改正案で、中身を見てみると、国連からも指摘を受けていましたし、難民とか国際法に専門知識を持つ弁護士からも指摘を受けていましたが、一つ私が個人的に問題だと思ったのは、難民認定申請を3回以上して、3回以上拒否された人を母国に強制送還することを可能にするという点で、これは国際法のノン・ルフールマン原則があって、難民を殺されたり迫害されるリスクがある母国に返してはいけない、強制送還してはいけないという国際法に違反していたんですね。それを国会で採決しようとしていて、私はこれはすごくおかしいと思って、すでに行われた支援者による国会前の集会に自ら参加して、卒業論文の一環として自らアクションを主宰することになりました。改正案は結局は廃案になったんですけれども、入管で起こった人権侵害は続いていますし、抜本的な法改正をする問題はまだ解決されていないので、今後も大学内での活動などを通して、自分でもこれから訴えていきたいと思っています。

この問題と向き合っていて感じる矛盾としては、オリンピックがあった時に、政府だったりメディアだったりいろんなところで「多様性を尊重しよう」と言われていたと思うんですけれども、「多様性を尊重する」アピールとして大阪なおみさんがトーチリレーをしたり、難民のオリンピック・グループだったり、表目はすごく難民だったり多様性を尊重していると思いつつ、陰では入管内では難民申請者に対する人権侵害があったり、難民認定が極端に低かったりという現実があって、私はその現実のギャップを知っていたので、まだまだ国際社会に誇れる日本ではないと感じています。(拍手)

**金廣志** ありがとうございます。

ウイシュマさんのことを含めた入管問題が新聞で大きく報道されたので、経緯をご存じの方もいらっしゃると思うんですけれども、彼女が現れて潮目が変わったんですね。それまでは簡単じゃなかったんですが、高校生の女性が一人現れて集会を呼びかけた。そしてそこで多くのスタンディングの抗議が起こった。大臣も知らん顔できなかつたんだと思います。まだまだこれから闘いは続くと思うんですけれども、頑張ってくださいと思います。

次に中村眞大君にお話しをしていただきたいと思いますが、私の高校の後輩なんです。51年後輩です。安達晴野君は52年後輩です。「何でお前、後輩を連れてきたのか」と言われるかもしれませんが、そうじゃないんですね。1年前に突然彼が僕の前に現れました。ネットで調べたら私の写真が見つかったらしいですね。その時に、半世紀前に北園高校で高校紛争があって、バリケードストをやって、そして校則を変えた。その時に東京中の高校が立ち上がって、約100校くらいが校則が無くなって制服が無くなったんです。それに対する取材をしたいということで、知り合いました。非常に頼もしい若者です。

中村君、よろしくお願ひします。



### 中村真大（なかむらまさひろ）

皆さんこんにちは。金さんの後輩の中村真大と申します。私は都立北園高校というところに在籍していました。今は明治学院大学の2年生です。私が主に取り組んでいる活動は校則の問題です。何故校則の問題に取り組むようになったのかというのは、私が高校に入学した後から、私が入学した高校は「自由の北園」と呼ばれていて、校則も無い、制服も無い、本当に自由な学校だったんです。私もそれに惹かれて試験を受けて高校に入ったんですけども、入ってみて、もちろん中学校と比べてすごく自由だったんですけども、それと同時に規制が段々と強化されているという現実と直面するようになりました。例えば髪の毛を染めるということ。今は当たり前のように普通の人たちが髪を染めて生活しているという現状がある中で、「高校生が髪を染めるとはけしからん」というような風潮が先生方であったり広くありまして、髪染めをしていた生徒に対して、「黒く染め直せ」というような指導をされるとか、だんだんと「自由の北園」ではなくなるんじゃないか、北園高校が自由な高校じゃなくなるんじゃないか、そういうような危機感を抱いていました。ただ、高校在学中はなかなか行動に移せなかったんですけども、高校を卒業する直前に、さきほど映画の予告編を上映していただ

いたんですけども、問題提起をしよう、自由の北園高校が、自由の伝統が続いていた北園高校が、このまま規制強化の波にのまれて普通の高校になってしまうのは絶対に嫌だということで、ドキュメンタリー映画を制作することを決めました。それが『北園現代史』という映画で、今もYouTubeで公開しているんですけども、その映画を作る過程で金さんと知り合いました。前半部分が今の北園高校の現状について、後半部分が50年前に北園高校で、当時の在校生がバリケード封鎖をして自分たちの主張を押し通した、しかも弾圧されることなく主張が通ってしまったということを知りまして、今の現状にも共通する部分があるんじゃないかと考えて、当時の在校生、私の先輩にあたる方々に取材をして、後半部分はそのドキュメンタリーになっています。それをYouTubeで公開したところ、学校の中はもちろん大きな反響があったんですけども、学校の外からもすごく大きな反響をいただきまして、メディアなどに取り上げていただくことができました。それがきっかけで、北園高校以外の校則の問題に取り組んでいる学校の生徒さんから連絡をいただきまして、北園高校だけの問題じゃないんだなということを実感するようになりました。今、ニュースで報じられている校則問題というのは、ツーブロック禁止ということだったり、元々地毛が茶髪の生徒が「黒髪に染め直しなさい」という指導で裁判になっているということやいろいろ報道されているんですが、私は原則校則については、元々無くていいんじゃないかと考えています。例えば、屋上に上がってはいけない、柵が無いから危ないという細かいのは置いておくとして、見た目の校則というのは絶対に無くすべきだと思っています。今回は、たまたま北園高校が髪染めの規制が強化されたということで髪染めだったんですけども、学生の見た目を管理するというのは、学校であろうと絶対にやってはいけないことだろうと思って、この問題にずっと取り組んでいるところです。原則、学校は自由であるべきだと思っています。

卒業した後も、校則の問題に取り組んでいるんですけども、それ以外にもドキュメンタリーの取材に興味がありまして、自分の関心のある分野に取材をしたりとか、そういう活動もしています。今日はよろしく願います。（拍手）

**金廣志** ありがとうございます。

中村君と会ったのは今年の2月くらいだったと思います。非常に成長しました。びっくりします。この年齢というのは、最初は大きな社会問題として考えたんじゃないと思うんです。違和感とか、学校のこんなところが嫌だとか、そういうところから入っていったと思うんですけども、そういう問題をどんどん自分の内面の中に繰り込んでいって、新しいものを作っていって、そして仲間をたくさん増やしていって、非常にこれからの活動に期待しています。

中村君の撮った映画で主役をしている安達晴野君、よろしく願います。



## 安達晴野（あだちせいや）

こんにちは、安達晴野と申します。今年の春に大学に入学しまして、今は政治学を学んでいます。私が高校でしてきた活動は中村眞大先輩が仰ったことと重なるので、そこは省略して、僕は今、校則問題をどう捉えているかというお話をさせていただきたいと思います。

私は校則問題というのは、人権と民主主義の問題だと考えています。まず一つは、頭髪のことです。生徒に限らず、人間が生まれながらに持っている権利を、何の理由もなく不当に制限するというような校則や指導が今行われている。しかも、それを先生の側も生徒の側も、場合によっては保護者側も何の疑問を持っていない。それが普通だと思ってしまう。そういう人権意識の欠落というのが、校則問題の一つの根本的な原因だと思います。

もう一つは、民主主義の問題にあります。校則というのは、基本的にほとんどの学校では先生が一人で決める、先生のみが一方向的に決めてしまう。決めるプロセスとか、そういうのはつきり書かれていないし、決まった校則に対して、生徒や保護者が声を上げて、なかなか反映されない、無視されてしまう、跳ねのけられてしまうという現状があると

思います。

私の知り合いの学校だと、そもそも校則はあるけれど、それがどういう校則なのか生徒に知らされていない。先生から状況に応じて「これは校則違反だから」と教えられていくという状況のところもあるみたいで、民主主義のプロセス、話し合ってお互い同意した上でルールを決めていく、もしもルールを付け加えたり変更する場合も話し合っ決めていくというプロセスが全く整理されていないというのが、もう一つの校則問題の根本的な原因だと思います。人権の問題と民主主義の問題というのは、学校現場だけでなく日本社会全体に共通しているものだと思っていて、おそらく学校現場に人権と民主主義というものが存在していないから、今の日本社会でも人権と民主主義が存在していない、若しくは危機にさらされていると思うし、社会に存在しないから当然教育現場にも存在しなくなってしまうという相互作用があると思います。なので、「たかが髪染めなんかどうでもいいじゃないか」という声を掛けられることもあるんですけど、「どうでもよくないんだ。これは学校現場でもそうだし、日本社会全体に通じる問題なんだ。もし髪の毛がどうでもいいと思っているんだとしたら、どうでもいい髪の毛の事を指導しないでくれ」と思っています。

以上です。（拍手）



## <若い世代からの疑問に当事者が答える>

### 一武力（暴力）について一

金廣志 ありがとうございます。

やっぱり若い人は熱いですね。我々も熱かったんですよ。半世紀前の若者もそうですが、現在の若者たちも様々な社会矛盾に向き合い、より良い未来社会を築こうとしているのかなと思います。さきほどの話にも出てきましたが、日本人は人間とか社会の本質に触れるテーマに対して議論することが苦手なんです。社会の表層をなでるような議論しかされていない。それが SNS の社会でも同じように表層をなでる議論しかされない、ということがあってと思います。

今日は未来を担う若者たちのためにも、社会経験を積んだ大人たちが本気で若者たちの疑問に答えていただきたい。今日は3人とも最初の時間から、よく映像を観ておいてくださいとお話しました。そして2部の議論を聴いて、その上で疑問に思ったこと、おかしいと思ったこと、あるいは共感すること、そういうことがあれば鋭く質問していただきたいです。

よろしく願います。

## 安達晴野

そうですね。動画を観てお話を聴いて、いろいろ気になったところがあるんですけども、最初に、岩田さんが「世の中、武力的な裏付けがないと変わらない。そして今もそう思う」と仰っていたと思うんですけども、それが正しとか正しくないとかは置いておいて、そもそも武力というものを何の目的で用いるのか。それはどういうことかと言うと、例えば相手を交渉のテーブルに引きずり出すために武力を用いるのか、それとも、そもそも相手をせん滅して自分たちが力を握るために武力を用いるのか、どういう風に武力を用いるのを想定していたのか、というのが気になります。

## 岩田平治



武力は核兵器にしても、相手を脅すためとか、自分を守るためとか、そういう中での武力ですね。やっぱりそういう裏付けがあって初めて戦争抑止力という言い方もありますし、実際に武力を用いて他国を侵略したり、北朝鮮みたいに脅しにミサイルを使うとか、日本の中でもそういうものに対して防衛費を上げなければいけない(という議論がある)。ただ平和、人権を唱えているだけで、果たしてそういうものを、いろんな考え方の人たちに囲まれている中で、今の日本のそういうものが守られるのかな、ということもあると思います。

そういう意味での武力であって、日本が原爆を落とされて悲惨な経験をしている国であることは事実ですし、広島

の慰霊碑に「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませんから」と刻まれているけれども、ただ刻まれているだけで二度とそういうことは起きないのかと言えば、決してそうではないし、日本の戦後の民主主義も、日本に原爆を落としたアメリカが持ってきてくれたものなんですよ。軍国主義に反対して日本人が民主主義とか人権とかを勝ち取ったわけではない。結局はアメリカの武力によって初めてそういうものが持ち込まれて、それが正しいか正しくないかは置いておいて、そういう事実があったんですよ。今、アメリカはウクライナを応援して、自分たちはやらないがウクライナにやらせていますが、実際ベトナムでアメリカは同じことをやっていたわけです。ロシアや中国はベトナムを応援して、最終的にアメリカはベトナムで勝てなかった。そうすると、ベトナムはあれだけ自分たちが悲惨な目に遭ったにもかかわらず、今度ウクライナに対して声を上げているかと言うと、決してそうではないわけです。それは最近の政治の関係で、ロシアから援助を受けたとかいろんなことがあるでしょうし、現在も繋がりが強いということもあるでしょうから、だからそういう意味で人類の歴史というのを見てみると、正義が勝ったんじゃないくて、勝った方が正義を作っているというのが、歴史の今までの過程だったということ踏まえて、これからの活動というか世の中の見方というものを、きっちり見て、自分たちの将来の活動なり人生を作ってもらえたらいいなと思います。

安達晴野 ありがとうございます。

## 金廣志

ちょっと僕の方からそれに関して、暴力については一番悩んできたことなんですよ。我々は暴力をどう考えて来たかと言うと、暴力を無くすための暴力と考えていたんですよ。歴史上、システムがチェンジする時に、暴力が行使されなかったことは無いんです。かつてチリのアジェンダ政権が平和的に政権を移行して社会主義を実現しましたが、ピノチェットのクーデターによって倒されました。韓国でも1960年に李承晩を倒した学生革命が起こりましたが、その後、朴正熙のクーデターが起こりました。我々の言っている暴力というのは、暴力を無くすための暴力だ、けど本当に必要な暴力というものはあるのか、ということ、今日は来ていませんけれど、先週青砥(幹夫)と熱く語りました。これは正直な話、いまだに解決のつかないことなんです。あなたたちも一緒に考えていって欲しいと思います。

安達晴野 ありがとうございます。



例えば、ガンジーは非暴力・不服従を訴えて、実際にイギリスの植民地支配から独立した。もちろんイギリス側から武力的な弾圧があったり、独立後にインドとパキスタンで分裂してしまっ

変革の程度は別として、暴力が伴わないと何かが変わることがないのかなと、自分はまだ半信半疑というか…。

### 金廣志

若者を責めるわけにはいかないんだけど、ガンジーのインドは世界で最も軍事大国の一つであるということも含めて、我々は暴力というものに対して、もっと深く考えないといけない。暴力に対抗する暴力しかないんだという考え方は、何の意味もない。今、世界で行われているロシアがウクライナを攻めたから、我々の軍事力を大きくしなければいけない、日本は防衛費を倍にしなくてはならない(という議論があるが)、どうやったら平和が来るんですか。戦争が起こらなければ、破局が来なければ、新しい時代は来ないと言っているだけですよ。我々はずっと非戦を語り続けること以外に、どうやって未来社会を創れるのかというのが、一応私の建前上は考えます。

**安達晴野** ありがとうございます。



### 中村真大

僕は連合赤軍事件の時は私は生まれていないですし、オウム事件の時も生まれていないですけども、連合赤軍と聞くだけで日本の歴史という感覚が正直しているんです。こんなこと言ってしまったら失礼かもしれないですけど、江戸時代の幕末の新選組の話ですけど、すごく規律が厳しくて何人も切腹したという話がありますけれど、本当にそういう類の扱いというような、頭の中でそういう風にあるわけですが、もちろん当時を知る方が生きていらっしゃるという点では違いますけど、一種の日本の歴史という

様に感じています。

今日、すごくいろいろな話を伺って一つ疑問に思ったことは、今の若い世代というのは、暴力にほとんど縁がないわけです。基本的に、今の若い人たちがどのように運動しているかということ、SNS を使うことがすごく多いです。特にツイッターです。次に多いのがインスタグラムだとかと思うんですけども、SNS を使って、時には人を煽ったりすることもあるだろうし、時には署名を集める。そういう SNS を使うというのが、使い方によってはすごい暴力に走ってしまうこともあるけれど、私たちがやっているような SNS を使った署名という民主的な方法に使うこともできるというので、使い方によっていろいろ変わってくるかなと思うんですけど、私たちは暴力というのは絶対にダメだ、対話が絶対に大事なんだと考えている人が、今の若い人の中ですごく多いと思います。

今日のお話を伺っている中で、連合赤軍の後にオウム真理教があったり、ずっと暴力という手段は歴史の中で繰り返されるというか、連合赤軍で終わったわけではなくて、オウムの事件があって歴史って繰り返されるんだ、とすごく感じたんですけども、今は私たちが暴力という手段を使って世の中を変えるということは全く想像できないし、僕たちの世代から暴力革命が生まれるというのは、全くもって想像できないんですけども、今後、また暴力の時代が来るのかどうかというのは、すごく気になっているところで、今すごく対話が大事だ、考え方が違う人たちとも話し合ってみようという人が多いんですけども、今後、また暴力しか世の中変えられない、というような時代がまた来てしまうのだろうか、というところが気になっているところです。

もう一つは、当時、連合赤軍で銃砲店を襲ったりとか、そういうことがあったと思うんですけれども、素朴な疑問なんです。連合赤軍の皆さんが銃砲店を襲って武力を持とうとした理由というのは、抑止力のための武力だったのか、それとも本当に銃を使って国と戦おうとしていたのか、というところが気になった点です。論理的に考えれば数十人と国では戦って勝てるわけないと思いますが、武力を自分たちが身に着けることによって、どういう手段を用いて、具体的に国を変えたかったのか、世の中を変えたかったのか、伺いたいと思います。



### 雪野建作

本当の事を言うと、1971年の1月2月の時点で、武力によって何かをするという必要性は全く無かったんですね。機動隊だって鉄砲を持って来るわけではないし、催涙弾とかその程度で来るわけで、運動する人たちを殺しに来ているわけではなかった。運動の側はそれに対抗して武力で、しかも銃を持って相手を殺すことも含めて、支配してしまうという現実には全くありませんでした。我々もそういうことを全く考えていなかった。

何のための銃かと言うと、(指導者の)川島豪が獄中で「俺の身柄を解放しろ」ということで、指導部が「やりましょう」ということで、具体的には裁判で被告人が拘置所から護送されて来る。そのところ

で銃を構えて奪還する。奪還する時に抵抗したらどうするのか、撃ち殺すのか、そんなことも考えていなかった。

だから我々自身も武装して、軍事的な闘争をやるという意味はなかったんです。ところがやってしまうと、さっき(2部で)山本さんが「言葉」と言いましたが、別の「言葉」が現れてくる。川島豪は、やっているうちに「武装闘争」だとか「敵のせん滅」だとか、「敵の抑圧を解除して、こちらに支配権を」と言い出すんですね。実際、そういうことは有り得ない話で、たまたま狭い範囲で一時的になったとしても、日本みたいな高度に発達した経済、社会の元では、たちまち抑圧されてしまって、何の意味もないことなんですね。ところが川島豪はそれを言い出した。永田(洋子)がどういう人か、良く分かるテキストがあります。彼女は何と言ったかという「銃を握りしめて初めて分かった」とバカなことを言った。別に銃といっても鉄の道具だし、それは持つ人がどういう意思を持つかによって違う意味を持つわけです。普通は鹿だとか猪だとか熊を撃つための道具として使われていたわけで、警察官の拳銃だって闘争をやっている人たちを殺すために持っているわけではない。だから、川島豪が言ったのは、全くの空語だったわけです。それ以上に永田(洋子)が言った「握りしめて初めて分かった」というのは、何の意味もない感情論で、何の説得力もないものなんです。ところが、それが当時の運動の中では、次第に「それで行こう」となってしまったんですね。

赤軍派はどう言ったかという、そもそも「交番襲撃の時に、相手を殺そうと思わなかったから負けたんだ」と言う人がいて、それに反論する人もいなかったし、5月くらいには革命左派は「銃を軸とした武装闘争」と言い出すようになってしまった。

もし警察官が人々の運動を銃を使って撃ち殺していくという状況があれば、それに対抗することは必要でしょうし、実際に対抗することが始まったと思うんです。言葉だけが先行

してしまって、「武装闘争」を言い出したんですね。言い出してしまえば、ちょっと聞くとそれが論理的であるかのような、言葉巧みな人が現れるわけです。森恒夫がその最たるものだったと思うんです。そういうのを永田(洋子)が見て、森恒夫はすごいと思うわけです。この人に指導してもらおうということで、川島豪から森恒夫に乗り換えてしまうんですね。

一言で言うと、言葉が先行してしまっただけ。実際の条件が何もなかった。それがその後の「総括」に至るわけです。

**金廣志** 岩田さん、どう考えますか？



### 岩田平治

まあ、そう仰っている雪野さんも指導部の一員だったんですね。捕まるまでは、思っていたにしても、永田(洋子)や坂口(弘)のそういう方針を納得していなかったと言いつつも、指導部の一員だったわけです。ですから、私は実際に総括が始まった現

場に居て、自分が同志を殴って、結局殺人罪とか死体遺棄罪で起訴されて、5年の実刑判決を受けたということがあります。それじゃあ、私自身が自分自身を顧みて、幹部たちはそう言っているだけで、私は反対していたからあれしたんじゃないし、幹部たちに協力しなければ、今度は私がやられるからやったわけではないんです。やっぱり、そういうことを選択をきちんとしながらも、そこで殴ることを選んだり、その場で居ることを選んで居たわけです。そういう意味で、自分自身を顧みた時に、吉本隆明さんが書いた『共同幻想論』を読んで、はっとしたんですけれども、人間は自分自身を抑圧することを知りながら、そういう抑圧する規範を作り出すことができる存在だと。その存在が共同幻想であり、それは個体の幻想と逆立する構造を持つ。それは人間の個人の中に持っているんですよ。ですから、革命とか革命戦士とか人民とか、そういうものを私自身が彼女たちの発言の中から選んで自分の中に入れて、そういうものを一番の共同幻想として掲げて、自分自身の対幻想とか個のいろんな思いとか、そういうものを押し殺していったと考えた時に、森や永田や坂口や、他の人たちにしてみても、喜々として仲間を殺すなんてことは有り得ないわけですよ。彼らも悩みながら、山本さんがさっき(2部で)言ったように、言葉が先行したみたいなお話じゃないんですけれども、やっぱりそういう言葉とか態度に自分自身が囚われてしまう、そういうことがああいう事態を生み出したんじゃないかなと思うんです。ですから、あの事件の様々な細かい局面を見てみると、女らしさがいけないとか、あるいは風呂に入っただけいけないとか、そんなことが言われて総括されたわけです。そのこと自体は愚問だし、永田の加虐趣味でも何でもなくて、そういう側面が出てくるようになったのかなと思います。

### 金廣志

ちょっといいですか。暴力についてなんですけれど、暴力というのはエスカレートする宿命にあると思うんです。要するに、さきほどの映像にもありましたけれど、60年安保の時のデモ隊は何も持っていない。機動隊は警棒を持っているけど。何人かはプラカードを持っていますけれど。そして1967年の10・8羽田闘争で山崎博昭さんが亡くなっていますけれど、彼も何も持っていないんですよ。何も持っていないまま殺されたんですよね。そうすると我々は武装しますよね。武装すると武器の方が先になっちゃうんですよ。例えば銃、私たちは赤軍派ですから、首相官邸占拠という話をしましたけれど、その時のイメージはすごく簡単で、11tトラックを3台盗んで、20人くらい荷台に乗って突っ込んで、皆が日本刀を持って切り込んでいくという、馬鹿げたことを考えているんです。その程度のことしか考えていない。銃を手に入れると考え方が変わるんです。指導も変わります。

先ほどの話と結びつくんですけれど、暴力は必ずエスカレートするんだ、そのことが一つ大きな問題になっていると思います。さっきの総括の話もありますけれど、(2部で)パトリアさんは止められると言いましたけれど、本当に止められるのかという悩みもいまだにあります。

### 雷野建作

議論して反対していた時も指導者の一員だったんじゃないかと言われたんですが、実は指導部ではなかったんですけれども、一番これは反省して、もっと別のやり方がなかったのかと思うところです。

具体的には、6月に北海道から奥多摩湖の奥の山梨と東京の県境の川のところに野営地があるんですが(そこに行って)、そこで議論して、どういう議論だったかという、「銃を軸とするかしないか」ということです。私が言わんとしたことは、「準軍事的な闘争をやる条件はないし、それはすべきでない」ということです。それでも武装闘争をやるという一般論について反対ではなかったし、あと私も若いから、そういう闘争に身体の中に燃えたぎるものがあるわけです。そういう意味で、結局丸2日議論したんですけれども、決着がつかなかった。その時にどう論争を収めたのかという、私が「その方針に納得できないし、承服しないけれども、多数決でしょうがない。この方針で行くことは認めます」と言った。はっきり言って、そのまま行ったら絶対やり続けることはできないし、いつか大きな壁にぶつかった時に、その時になるまで自分の議論は受け入れられないだろう、そういう風に思っていました。それで、私は議論に負けて、形式的な問題ですけれども、指導部の中で外交的なことをやる組織部の一員でしたから、そういう場所の中で動く役回りでしたから……。さっきの武装闘争の問題については、私はそういう立場でした。そういう立場だったから、川島豪とだんだん意見の違いが出てきて、議論をして、一番最初の段階で、「これは間違っている」という議論をやったんですけれども、結局、私は一人離党するという形になりました。それが、あの1年間の私が歩んできた道です。何か別のやり方があったのかという、私は金さんのように根性がないから、何しろ指名手配されていた。組織的な支えなしに生き抜くというのはどうすればいいか分からなかったし、そもそもそういう発想がなかった。それでしょうがないから労働しに行って、まもなく捕まってしまったということです。

**中村真大** ありがとうございます。

最初にお二人がお話されていた言葉の恐ろしさ、人の話した言葉の恐ろしさであったり、自分が発した言葉に囚われてしまう恐ろしさというのをすごく感じました。

もし森恒夫が当時ツイッターをやっていたら、森さんや永田さんのセンセーショナルな演説がツイッターやtiktok(ティックトック)で拡散されていたら、自分たちの周りの大学生だけでなく、もっと幅広い人たちに彼らの言葉が届いていたらどうなっていたんだらう、とちょっと考えましたし、逆に言えば、今もしそういった事態に陥ったとしたら、当時と同じようなことがまた起きてしまうのだろうか、というようなことも考えました。

ありがとうございます。



## 一「総括」殺人を阻止する方法はあるのか一

**宮島ヨハナ**

さきほどの話と繋がるかもしれないんですけども、私はこのシンポジウムに出ることが決まった時に、全然あさま山荘事件も連合赤軍事件の事も全く知らなくて、自分でドキュメンタリーとか観ていたんですけども、やっぱり何で理想的な平和な社会を目指して純粋な気持ちで進んでいた大学生が、リンチ殺人に走ってしまったかというのが、すごく私も疑問で、自分なりに考えてみたんですけども、いま取っている平和研究という授業があって、そこで集団的な暴力の一因となるのが、やっぱり権力者に従うことというのを学んで、その例として、ミルグラ

ム実験(閉鎖的な状況における権威者の指示に従う人間の心理状態を実験したもの)というのがあって、権力者の人が目の前にいる人を電気ショックしてくださいと言って、普通の学校の先生だとか一般人の方にそういう風に言って、最初はためらうんですけども、最終的には全員電気ショックをしてしまうという実験結果で、それを聞いたときにすごくこのリンチ殺人にも当てはまると思ひまして、私が向き合っている入管問題というのでも、結構入管施設内で職員による暴行が問題になっていて、職員の方が収容者の人に対して制圧という言葉を使って暴行を行って、結果として骨折とか失明するという事件が起こっているんですけども、それもやはり職員自身が悪いというよりも、職員がそういう暴行をすることを許してしまっている組織というか、上に立っている組織だったり、制度が悪いと私は個人的に思っているんで、今回連合赤軍事件が起こってしまった理由としても、そういう権力者と、パトリシアさんも言っていたように、日本では他国と比べて上下関係が強い文化もあると思うので、そういう意味でリンチ殺人を行ってしまった一因として、一つだけの原因ではないと思うんですけども、いくつかの原因の一因として、そういう権力に従うということがあると思ひて、それに対してパトリシアさんが「それを阻止する方法があるんじゃないか」と言ったんですが、お二人はそういう阻止できる方法があると思うのか、お聞きしたいです。



**岩田平治**

自分自身が過去を振り返ってみて、やっぱり阻止する方法は無かったと思ひます。というのは、私たちの組織の中で一番あれなのは武装闘争だし、革命戦士になることだし、その他の人道的とか倫理的とか人間に命が大事だとか平和とか、そういう次元が無いわけです。そこからの議論でないと議論にならないわけです。ただ、感性的にはこういうものに付いていけないということで、私は逃走というか、山で殺されていた小島さんの16歳の妹を山に連れてこいと(言われた)、私の彼女もそうだったんですね。私の彼女も革命戦士になろうと思ひていたわけではない、ただ私との関係の中でたまたま

たまたまそういう闘争に関わっていくことはなにもあらずだったんですけども、山に連れて来たからと言って指導部が彼女たちを必ず革命戦士にするという保証もないし、結局、名古屋で活動して、彼女たちとも連絡が取れなかったんですけども、最終的に山に入った時に逃げたんですけども、それでも私はこの革命が間違っているとは当時は思ひていなかったんです。正しいかもしれないけれど、私は付いていけないという形なんです。ですから、私が離脱した後も引き続きリンチ・殺人みたいなことが起こるんですけど、私の時には3人死亡しているのかな、そのうち2人が縛られた状態だったんですけども、その後更に6名

が処刑とかいろんな形で殺されているんですよ。ただ、私が山から(名古屋に)活動に出された時点では、もうこれでいたい終わったということだから活動を始めたと理解していたわけです。ですから、私が逃げる時に、幹部の人たちがどういう風に考えるかと思ったら、私が警察に捕まって何か言う前に私を捕まえて殺すんじゃないかと考えてたわけです。ですから親戚を頼って大阪に行って、大阪の親戚のついでで和歌山の山奥のところを紹介してもらって、そこで働いて隠れていた。ただ、幹部たちは私を連れ出すのに、自分の家族とか妹とか東京に居ましたから、そういうのを拉致するなりして「出てこい」と言えば出ていかざるを得ないと考えていました。ですから、私が正しいんだと離脱したわけではないんですね。もう付いていけないということなんです。ですから、そういう意味では、さきほども言いましたように言葉は何のために必要かと言うと、「組織」になったり「大勢」になったり「我々」になったりするためには必ず必要なんですよ。

私の考えを伝えるのは限界があります。私の孫も高校1年生になるので、あと数年経つとこのようになるのかなと思うと、とてもこれほど立派な意見を言えるようになるとは思えないですが、素晴らしいことだと思うんですけれども、考えていってもらいたいことは、やっぱりある程度多くの人の賛同を得ないと力にはならないと思うんです。武力云々ではなくて。そういう中で「私」が「私たち」になり、そうするといろんな軋轢とか問題が出てくるんですね。その時に意見の違う人たちも出てくるだろうし、意見の違う人たちを従わせるためにはどうしたらいいのかとか、多数を得るためにどうしたらいいのかとか、そういう問題に直面すると思います。ただ、そういうものを、いろんな形で解決するというか、新しい工夫を生み出すような形で、今やっている運動を続けて行ってもらえたらと思っています。

### 雷野建作

パトリシアさんが、「阻止する方法はある」と言った。私は、これは「あるけれども、それも限界がある」と。それで、岩田さんが言ったことは大事な事なんですよ。いろいろ理屈としては納得せざるを得ないけれども、感性的にはどうしても納得できない、付いていけない、これはとても大事な視点なんです。



最後の拠り所として、ある分岐路があって、その時、社会的な圧力だとか、それまで自分が生きて来たことだとか、そういったものをどこかでどちらかに行かなければいけない。その時は本当に自分の感性を信じて、それから言葉にできないけれども何か違う、どうしてもこれは間違いだという時は、それを否定しない。(間違いを)否定する方向に進むべきだと思います。そういう意味で、岩田さんは正しい道を歩んだと思います。ただ、その団体がそういう人が1人か2人いたとしても、団体全体としていい方向に行っている

か、これはまた別問題です。ただ、一人ひとり結局1人なんです。自分なわけですから。自分と団体は別のものであります。その時に、個人としてどういう身の処し方をするかと言えば、今言ったような処し方をするしかないし、その方が正しい。そういう人が段々増えていけば、団体としても方向を変えざるを得ないんじゃないかなと思います。

### 金廣志

さきほど岩田さんとも話したんですけれども、パトリシアさんがそういうお話をされた時に、「ちょっと我々は考えられないね」と。ある一つの集団が、ある一つの思想を持って、そしてそれを真実だと思って活動した時には、離脱することはできないですよ。ですから、私たち自身が、さきほども話がありましたけれど、その前の段階で一つひとつその疑問を常に公にしていく、内側に秘めて「まあいいか」と1回重ねた、「こっちもいいか」と2回重ねた、その時から地獄が始まると思うんですよ。宮島さんはキリスト者ですから、ある意味での新しい別の概念を持ってくる方法もあります。それは愛かもしれませぬ。ただ、さきほど岩田さんの話にもありましたけど、我々が一度共同幻想に絡めとられたら、我々の言葉は個人の言葉ではなくなりますから、難しいと思います。

何でそんなことを言っているかと言うと、あなたたちの将来が決してそうならないという、そういうことを教訓にして今後生きて行っていただきたいと思うから、そういう話をさせていただきます。

最後に本当に短く、3人の若者に、未来社会に生きる希望と理想を語っていただきたい。また、そのお話の後に、半世紀前に未来社会を築こうとした岩田さんと雪野さんに、若者たちへのエールを送っていただきたいと思っています。

## <若い世代が未来社会に生きる希望と理想を語る>

### 宮島ヨハナ



そうですね。私の理想の社会は、やっぱり綺麗ごとに聞こえちゃうかもしれないですけど、一人ひとり違うと思っていて、この社会って皆が同じというよりかは、日本人という括りの中にも、様々なバックグラウンドだったり、ジェンダーだったり、どこの国から来たとか、そういう多様な人間がいる中で、違いを認め合って、尊重し合って、隣人を愛していくというのが私の理想です。

すごく高い理想だとは承知しているんですけども、それが理想で、今は理想とは程遠い現実ですけども、一人ひとりが社会で生きて行く中で、隣にいる人も家族だったり友達だったりということも尊重し合って、愛し合って、お互いを高め合っていくという、そういう社会が理想だなと思いますし、今の日本社会ですと、結構少子化が問題になっているので、これから外国人の労働が必要になってくると思うんですね。そういう中で技能実習生の問題だった

り、外国人労働者の問題だったり、入管の中の難民の問題だったり、様々な問題に直面していると思うんですけども、そういう問題と向き合っていく中で、違いを尊重し合って、どう壁を壊して共存していけるかということを、市民一人ひとりが考えて、例えば今度(参議院)選挙がありますけれど、そういう時にも、そういうことを視野に入れて考えていって、外国人であっても、どんな人であっても安心して暮らせる社会、それは制度の改革かもしれないし、法律の改正かもしれませんが、そういうステップを取って、より生きやすい、どんな違いがある人間も生きやすい社会が私の理想の社会です。(拍手)

### 中村真大



そうですね。今、宮島さんが仰ったことにすごく共感するんですけども、僕が思うのは、今、物事とか人に対して一つの局面からしか見ない人がすごく多い気がします。例えば、沖縄で高校生が警察官に警棒で殴られて失明してしまって、それで怒った沖縄の若者たちが警察署を取り囲んだというニュースがあったと思います。その時に、SNSとか世論は少年を失明させた警察ではなくて、そんな時間、夜にバイクに乗っていた高校生を叩いたというのがすごくショックでした。その高校生は、夜出歩いていたかもしれない、もしかしたら暴走族に属していたかもしれない。けれども、警察官に顔を殴られて失明したということは紛れもない事実で、それに関しては同情するべきで、警察が非難されるべきだと思うのに、なぜか「あいつはそんな時間に夜出歩いていた。そういうことさ

れてもしょうがないよね」と高校生批判がネット上に出回ったことがすごくショックでした。確かに彼は暴走族とかに属していたかもしれないという側面があったとしても、「でもこれとこれとは別問題なんだよね」と考えられる人がすごく少ないと思っています。今日の連赤の話でも、人が死んだということだけをすごく取り上げて、テロリストだと考えて、その奥にある背景だとか、そこに至るプロセスというのを全く無視して、「怖い怖い」と片付けてしまうという人たちもすごく多いと思うので、それはやはりテレビだとか SNS だとかいろいろな原因があると思うんですけど、もちろん SNS とかテレビの良さはあるんだけど、一つの局面から見るんじゃなくて、もっといろいろな複数の視点から見て、最終的に判断するというようなことが出来るような人がたくさんいる世の中、そういうような世の中で多様性とか認め合っていけたらいいのかなと思っています。(拍手)

## 安達晴野

僕は、人間が人間として、一人ひとり個人として尊重される社会になって欲しいと思っています。いろんな個性があると思うんですけども、そういうものを受け入れて尊重できるような関係性というのを築ければいいな、とっていて、正しく私が通っていた都立北園高校というのが、それに近かったと思うんです。北園高校に入ると、めちゃくちゃ個性が伸びる、個性的になると僕は思っていて、北園高校は板橋区にあるんですけど、僕の地元も板橋区で、僕の中学校から、だいたい1学年10人くらい北園高校に進学する。皆、北園に入って顔が明るくなった。あと、僕が驚いたのは、この子って本当はこういう感じの子だったんだ、と思ったんですね。やっぱりそれは、自由な環境の中で、今まで抑圧していた個性を出せるようになった。また、その出した個性に対して、誰かが文句を言ったりするのではなくて、「そういう人もいるよね」と受け入れる、受け入れるというのは好きになるとかそういうことではなくて、「そういう人もいますでしょう」と受け止めることが出来ていたのかなとっていて、結構世の中を見ると、自分と違ったものを受け入れることが、自分を否定することになると勘違いしている人がたくさんいるのかなとっていて、けれど絶対そうじゃないと思うんですよ。自分と違うのを認めたからと言って、自分の価値が否定されるわけじゃないし、逆に自分に価値があるから、自分と違う人は価値がないというわけでもないと思うんです。やっぱり、それぞれがお互いの個性とか価値とかを受け止めて、尊重できるようになる社会であって欲しいと思っています。

それで、社会が変わるか変わらないか、社会が変わるためには暴力が必要かも知れないというお話があったかと思うんですけども、自分は暴力が無くとも社会が変わると思っています、その正しく成功体験として自分が今まで取り組んできた校則問題があると思っています。もちろん、校則問題はまだ解決したわけじゃないし、発展途上というか、今、正に変わろうとしている最中だと思うんですけども、僕はずっと自分の意見が政治に反映されたり、若しくは社会に反映されたりすることが無いんじゃないか、絶対に無いとまでは思っていなくても、ほとんど無理だろうみたいに思っていたんですけども、校則問題にこの3年間取り組んできて、自分が声を上げることによって、本当に社会とか政治が変わっていくんだと実感することができたんですね。

今年の4月から、全都立高校で、いわゆるブラック校則と呼ばれている一部のもの、例えばツーブロック禁止とか、下着の色の指定とか、そういうものが無くなったりとか、そういう風にゆっくりではあるけれども、絶対に声を上げることによって社会が変わると僕は思っています。



僕はメンタルが結構強いし、楽道家でもあるので、確かに国会など見るとすごい暗い気持ちにはなるけれども、それでもきっと社会は良くなっていくだろうし、自分が良くしていきたいと思っています。(拍手)

## <若い世代へのエール>



## 金廣志

すばらしい意見をいただきました。最後に岩田さんと雪野さんに、若者たちに、もう自分の事はいいから、若者たちに未来に対するエールを送ってください。

## 雷野建作

さっきも言ったんですけれども、自ら信じることに従って進んでください。そして、自分の感性を信じてください。これだけです。

## 岩田平治

若い人たちの意見を聴いて、これからの日本は決して捨てたものじゃないと思いました。ただ、今回、50周年ということでテレビの取材とか新聞の取材を受けて、私より若い30代40代の人たちが、決して未来に対して希望を持っていないわけではないけれども、やっぱり社会の中でも揉まれて、少しは屈折した感じになっているかなという気がしました。ただ、今日の大学生の皆さんは、そういう素晴らしい考え方や希望を持っておられるので、そういうものを出してもらえればいいなと思います。

応援していますので、是非がんばってください。(拍手)

**金廣志** 今日は皆さんありがとうございました。

私たちのこれまで多くの誤り、それに対する反省を重ねながら、この半世紀を生きてきました。しかし、半世紀前に抱いた理想や希望を捨てて生きてきたわけではないんですね。より良い未来社会を築くために、私たち自身も思想的研鑽が必要だったと思います。そこで得られた反省を、こんな若者たちの未来に伝えていかなければならないかなと思っています。

半世紀前に私たちが抱いた理想や希望が、より良い形で進化して、新しい若者たちに受け継がれることを期待します。この未来を担う若者たちに拍手をお願いします。(拍手)

どうも今日はありがとうございました。これでシンポジウムを終わらせていただきます。

(終)

## 【アーカイブス】

「連合赤軍事件の全体像を残す会」では、「あさま山荘」40周年と45周年に集会を開催しています。このブログにも報告を掲載していますので、以下のアドレスからご覧になれます。

No245 シンポジウム 浅間山荘から四十年 当事者が語る連合赤軍

<http://meidai1970.livedoor.blog/archives/2012-06-22.html>

No471 浅間山荘から45年「連合赤軍とは何だったのか」第一部

<http://meidai1970.livedoor.blog/archives/2017-08-04.html>

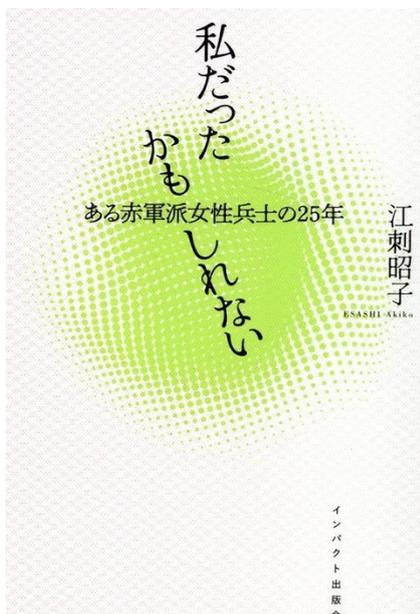
No472 浅間山荘から45年「連合赤軍とは何だったのか」第二部

<http://meidai1970.livedoor.blog/archives/2017-08-18.html>

連赤関連記事 (もっふる通信特別号 3・31人民集会特集 1972年4月20日)

No241 連合赤軍浅間山荘銃撃戦と総括による死をどう受け止めたのか

<http://meidai1970.livedoor.blog/archives/2012-05-25.html>



## 【重信房子と遠山美枝子 「47NEWS」よりリンク】

『私だったかもしれない 一ある赤軍派女性兵士の25年』の著者、江刺昭子さんが「47NEWS」に掲載した記事です。

「若き日の重信さんと親友遠山美枝子さんの生の軌跡を素描することで、あの時代の空気や党派の動向、女性たちの生き方をたどり、考えたい。」(江刺昭子)

「47NEWS」は、全国の52新聞社と共同通信のニュースを束ねた地方紙連合ウェブサイトで、今回の記事は「47リポーターズ」に掲載されたものです。

リンクを貼らせていただきました。以下のアドレスからご覧ください。

重信房子と遠山美枝子(1)

「マルクスよりルソーが好き」バリケードの中で意気投合した2人数奇な運命を分けたものは何か

<https://nordot.app/927070795949735936?c=3954674183946240>

1

重信房子と遠山美枝子(2)

「社会科の先生に2人でなろう」お茶の水をカルチェラタンに 佐世保・王子・三里塚...続く闘い  
<https://nordot.app/927076095154192384?c=39546741839462401>

重信房子と遠山美枝子（3）

「ふう、あなたが先に死ぬんだね」アラブにたつ日の涙 樺美智子につながる美質

<https://nordot.app/927082942224171008?c=39546741839462401>

重信房子と遠山美枝子（4）

純粋な若者たちを追い込んだものは何か 「兵士として徹底的に自己改造する」と山へ

<https://nordot.app/927087534198374400?c=39546741839462401>

重信房子と遠山美枝子（5）

女を後ろに下がらせる組織にあらがう 「私たちが新しい世の中を作る」と最後の言葉

<https://nordot.app/927094450091245568?c=39546741839462401>